



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	NHK連続放送劇「鐘の鳴る丘」の一過性打破と視覚化：放送脚本刊行・舞台上演・映画を中心として
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	教育史・比較教育論考, 21, 1-51
Issue Date	2014-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55050
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00057796_21_1.pdf



NHK 連続放送劇「鐘の鳴る丘」の一過性打破と視覚化

——放送脚本刊行・舞台上演・映画を中心として——

逸見勝亮

《目次》

はじめに

1. 連続放送劇「鐘の鳴る丘」の放送劇における位置
2. 連続放送劇「鐘の鳴る丘」の多様なヴァージョン
3. 本研究の課題

I 連続放送劇「鐘の鳴る丘」が一世を風靡したということ

1. 連続放送劇「鐘の鳴る丘」・主題歌「とんがり帽子」の拡がり
2. 「東京哀詩」と「鐘の鳴る丘」——菊田一夫の自作評——

II 連続放送劇「鐘の鳴る丘」の構成

1. 放送劇「鐘の鳴る丘」の主な登場人物
2. 放送劇「鐘の鳴る丘」の概要
3. 放送劇「鐘の鳴る丘 白樺人形の巻」の主な登場人物と概要

III 連続放送劇「鐘の鳴る丘」脚本の刊行

1. 『鐘の鳴る丘 (第一篇) (隆太の巻)』・『鐘の鳴る丘 (第二篇) (信州の巻)』と連続放送劇「鐘の鳴る丘」
2. 「しかし、未だ望みはあるのです」——菊田一夫が希求したもの——

IV 舞台劇「鐘の鳴る丘」の上演

1. 舞台劇「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」の上演
2. 菊田一夫とモルナール
3. 舞台劇「鐘の鳴る丘 信州篇」の上演
4. 「鐘の鳴る丘」(内村直也・三島由紀夫・宮津博編『日本童話劇』下巻)

V 映画「鐘の鳴る丘」

1. 映画「鐘の鳴る丘」三部作
2. 映画「鐘の鳴る丘」評

むすび ——放送劇脚本刊行・舞台劇への改稿と上演、映画は「未完」——

付表 I 「菊田一夫作放送劇一覧」

付表 II 「菊田一夫オリジナル放送劇を原作とする映画一覧」

はじめに

1. 連続放送劇「鐘の鳴る丘」の放送劇における位置

菊田一夫(1908～1972年)と放送劇とのかかわりは、1932年12月17日に放送した「沙漠のメリー・ゴオランド」(NHK、20:50～21:30、以下NHKと特に断らない。民間放送開始は1956年9月である)までさかのぼる。当時の番組案内新聞記事には「沙漠のメリー・ゴオランド」は「映画モロッコ〈1931年2月公開〉とアトランチード〈1932年10月公開〉を菊田一夫氏がつきまぜて作った」とある¹。菊田一夫は、「沙漠のメリー・ゴオランド」を嚆矢として、1958年までに少なくとも63編の放送劇脚本を執筆した(巻末に、付表I「菊田一夫作放送劇一覧」を掲げた)。

これら63編のうち、浮浪児・戦争孤児が登場する放送劇は、「東京哀詩」・「鐘の鳴る丘」・「鳩の団九郎」である。3編の放送日・放送時間は以下のとおりである。

①「東京哀詩」1947年1月18日、14:00～15:00

②「鐘の鳴る丘」

1947年7月5日～12月28日、毎週土・日曜日 17:15～17:30

1948年1月4日(お休みの巻)、18:45～19:00

1948年1月10日～3月28日、毎週土・日曜日 18:45～19:00

1948年4月1日～1949年1月4日、毎週月～金曜日 18:15～18:30

1949年1月5日～1950年4月27日、毎週月～金曜日 17:30～17:45(1949年7月2日は13:00～14:00、日比谷公会堂公開中継放送)

1950年4月28日、17:15～18:00

〈「鐘の鳴る丘 白樺人形の巻」〉

1950年5月1日～1950年12月29日、毎週月～金曜日 17:30～17:45

③「鳩の団九郎」1948年2月23日、21:15分～22:00²

「東京哀詩」は菊田一夫が執筆した舞台劇「東京哀詩」6景(1947年1月12日～25日、3月1日～10日、薔薇座、日劇小劇場)の3景までを、自ら放送劇に改稿した脚本を、舞台上演中の1月18日に放送したものである³。

「東京哀詩」は、東京駅のガード下で暮らす新藤忠夫たち5人の戦災浮浪児・美佐枝(街の女)・復員兵鷹鳥桂太(露店組合の若い者)は、店を構えて一緒に暮らすことを願っているが、鷹鳥が親分の命で露天組合の勢力争いに加わり殺されて希望が潰えることを予想させる。浮浪児が夢で天国の親と会う明るい場面は、浮浪児松吉・鹿之助の「おい、浮浪児狩りだぞ……」・「浮浪児狩りだぞ……」との台詞で瞬断し、暗澹たる浮浪児の未来を示唆して終わる。

「鐘の鳴る丘」は、復員兵加賀見修平が浮浪児・戦争孤児を使喚する暴力団・人々の偏見と闘い、長野県に浮浪児・戦争孤児のための「少年の家」、東京都奥多摩に「少年の家東京支所」を建設し、「少年開拓団」を組織して北海道に移住して「少年の村」を建設し、隆太ら浮浪児・戦争孤児の自活を希求した物語である。主題歌は菊田一夫が作詞し古関裕而(1909～1989年)

が作曲した「とんがり帽子」(東京放送児童合唱団)である。「鐘の鳴る丘」に引き続く「鐘の鳴る丘 白樺人形の巻」は、「少年の家」が製作して販売している「白樺人形」を介して、復員を待っている母娘が夫・父と、東京大空襲で娘を喪ったと思っていた母がわが子と再会する物語である⁴。

「鳩の団九郎」は浅草が舞台である。与太者が浅草寺の僧への嫌がらせに死んだ鳩を送りつけようと、4 人の浮浪児が団九郎と名付けて飼っている鳩を殺し、それを憤る浮浪児の物語である。浮浪児たちの「鳩だって人間の言葉が判るんだぞ」、「判らねから、俺の顔みて笑っているんじゃないか」、「鳩が笑うかよ」、「笑うよ」との台詞で、無垢な浮浪児をファンタジックに描出した。対照的に浮浪児の周囲には、若い女性を喰い者にする与太者・与太者による小売いの迫り立て・ズベ公・踊り子を配して写實的に描いた。区役所の戸籍係が浮浪児のために殺された団九郎の代わりの鳩を用意し、ズベ公による与太者の殺害で終わる⁵。

「鐘の鳴る丘」は、放送期間は約3年6ヶ月、放送回数は790回であった。菊田一夫が脚本を執筆したオリジナル放送劇「さくらんぼ大将」(1951年1月1日～1952年3月31日、毎週木曜日17:30～17:45に放送)の放送期間は約1年3ヶ月、放送回数は319回、同じく「君の名は」(1952年4月10日～1954年4月1日、20:30～21:00に放送)の放送期間は約2年、放送回数は98回であった。「鐘の鳴る丘」は、菊田一夫が執筆した放送劇のなかでは、放送期間と回数において突出していた⁶。

NHK 放送劇で「鐘の鳴る丘」の放送期間と回数を上回るのは、放送期間は約5年7ヶ月(1947年7月1日～1953年4月10日)、放送回数は1377回に達した連続放送劇「向う三軒両隣」である。しかし、「向う三軒両隣」は八住利雄・伊馬春部・北条誠・山本嘉次郎(後に北村寿夫に交代)で執筆したのに対して、「鐘の鳴る丘」は菊田一夫がひとりで執筆したという点で、特筆すべき放送劇であったことに多言を要すまい。

「東京哀詩」は、浮浪児松吉・鹿之助の「おい、浮浪児狩りだぞ……」・「浮浪児狩りだぞ……」との台詞で、「鳩の団九郎」はズベ公による与太者の殺害で終わり、暗澹たる浮浪児・戦争孤児の未来を示唆した。それに対して「鐘の鳴る丘」は、「少年の家」から山中に逃げ込み熊と暮らす浮浪児、ツバメの脚に巻き付けた秘密の地図、猿が棲む阿寒の森と地下の洞窟、洞窟に隠された宝物など荒唐無稽なエピソードを冗漫に盛り込んでいるが、復員兵加賀見修平は体を張って暴力団を批判して浮浪児・戦争孤児を守り、浮浪児・戦争孤児も危険をおかして暴力団・強盗団と対決し、ナレーションは繰り返し暴力団を批判した。浮浪児・戦争孤児の母を探し当て、富裕な養父母と縁組みして新たに家族をつくった。そして、浮浪児・戦争孤児の自活——信州の「少年の家」の自給自足的農耕生活、そこで製作した白樺人形の販売、収益を目指した音楽会の開催、北海道における原始林の開墾と「少年の村」の建設——を希求した。換言すれば、「鐘の鳴る丘」は、「東京哀詩」・「鳩の団九郎」のように浮浪児・戦争孤児の暗澹たる未来を示唆して終わったのではない。菊田一夫は、CIEに求められたという浮浪児・戦争孤児の「救済」を誰かに求めたのではなく、浮浪児・戦災孤児に自活を課したのである。「少年の家」を建設以降の加賀見修平は存在感が薄く、精彩を放つのは隆太・留男・クロたち浮浪児・戦争孤児で

あると記しても過言ではない⁷。

「鐘の鳴る丘」放送終了直後の中川忠彦の評を、引いておく意味はあるだろう。

この劇は当時の社会にいろいろの問題をなげ、この番組くらい問題になったものは放送史上かつて無く、放送史上のみならず、全ジャーナリズムを通じても絶後でろう。毀誉褒貶交々互つて、少し大げさに言うなら日本中カナエの沸くがごとくであつた。しかし菊田さんの正義感と信念はなおこのうちにあつてひるむことなく毎日々々つかれたように彼の信念をつらぬいた。一抹の悲しみをたたえた「鐘がなりますキンコンカン」の歌は、全国のいかなる僻地でもうたわれたのだった⁸。

「鐘の鳴る丘」と「東京哀詩」・「鳩の団九郎」とでは、浮浪児・戦争孤児を描いたという点は共通していたが、「鐘の鳴る丘」では浮浪児・戦争孤児に生活の場を与え、暴力団と対決させたという点で、自ずと位相を異にしていた。

「鐘の鳴る丘」の主題歌「とんがり帽子」を取り上げた新聞が、「明日のしあわせ願った」と見出しを掲げたのは、このような「鐘の鳴る丘」の「正義感と信念」のごく自然な受容の在り方をよく示してもいた⁹。

2. 連続放送劇「鐘の鳴る丘」の多様なヴァージョン

放送劇「鐘の鳴る丘」のヴァージョンは、管見の限り下記のようなものである。とりあえず、放送劇脚本・舞台劇脚本・映画・菊田一夫による小説「鐘の鳴る丘」・SPレコード・紙芝居・幻灯台本・絵本・トーキーナリオに分類し、それぞれを刊行・作成順に並べた。

放送劇脚本

- ①菊田一夫『鐘の鳴る丘 (第一篇 隆太の巻)』ラジオ新聞社出版部、1948年
- ②菊田一夫『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』ラジオ新聞社出版部、1948年
- ③「鐘の鳴る丘 (ラジオ・ドラマ) 第一篇・隆太の巻より」、菊田一夫『菊田一夫戯曲選集』1、演劇出版社、1965年

舞台劇脚本

- ④菊田一夫「N・H・K連続放送劇より 鐘の鳴る丘」、『青年演劇』1948年5・6月号
- ⑤菊田一夫「鐘の鳴る丘 信州篇」、1948年、所在は不詳
- ⑥菊田一夫「鐘の鳴る丘」、内村直也・三島由紀夫・宮津博編『日本童話劇』下巻、誠文堂新光社、1951年

小説

- ⑦菊田一夫『鐘の鳴る丘 ガード下の風』巻一、東京出版、1948年
- ⑧菊田一夫『少年少女のための鐘の鳴る丘 第一部 隆太の巻』社会思想社、1949年
- ⑨菊田一夫『鐘の鳴る丘 焦土の少年たち』第1巻、四季書房、1951年
- ⑩菊田一夫『鐘の鳴る丘』上・下、宝文館、1953年

- ⑪菊田一夫『連続放送劇より 鐘の鳴る丘』、『国民の友』1948年4月号

映画

- ⑫『鐘の鳴る丘 第一篇 隆太の巻』松竹大船、1948年、監督佐々木啓祐、東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵
⑬『鐘の鳴る丘 第二篇 修吉の巻』松竹大船、1949年、監督佐々木啓祐、所在は未詳
⑭『鐘の鳴る丘 第三篇 クロの巻』松竹大船、1949年、監督佐々木啓祐、所在は未詳
⑫～⑭の松竹ホームビデオ版（2003年）がある。

SP レコード

- ⑮「放送劇 鐘の鳴る丘（一）」コロムビア、1948年9月、商品番号 A418、0329
⑯「放送劇 鐘の鳴る丘（二）」コロムビア、1948年9月、商品番号 A418、0324
⑰「放送劇 鐘の鳴る丘（三）」コロムビア、1948年9月、商品番号 A419、0324
⑱「放送劇 鐘の鳴る丘（四）」コロムビア、1948年9月、商品番号 A419、0317

紙芝居

- ⑲菊田一夫原作・伊勢田邦彦絵画『鐘の鳴る丘』第一編、画劇「鐘の鳴る丘」刊行会、1948年
⑳菊田一夫原作・伊勢田邦彦絵画『鐘の鳴る丘』第三編、画劇「鐘の鳴る丘」刊行会、1948年
㉑菊田一夫原作・伊勢田邦彦絵画『鐘の鳴る丘（東京編）』第四編、画劇「鐘の鳴る丘」刊行会、1948年
㉒菊田一夫原作・伊勢田邦彦絵画『鐘の鳴る丘（信州編）』第四編、画劇「鐘の鳴る丘」刊行会、1948年

幻燈台本

- ㉓東映社幻燈部提供・菊田一夫原作・新谷松忠雄脚色「幻燈台本 鐘の鳴る丘 木枯の巻」その1、『フレンド』1948年7月号、幻燈フィルムは未詳
㉔東映社幻燈部提供・菊田一夫原作・新谷松忠雄脚色「幻燈台本 鐘の鳴る丘 木枯の巻」その2、『フレンド』1948年9月号、幻燈フィルムは未詳
㉕東映社幻燈部提供・菊田一夫原作・新谷松忠雄脚色「幻燈台本 鐘の鳴る丘 木枯の巻」その3、『フレンド』1948年12月号、幻燈フィルムは未詳
㉖菊田一夫原作・新谷松忠雄脚色・東映社幻燈部制作『幻燈台本 彩色長篇絵物語 鐘の鳴る丘』ハマ書房、1948年、幻燈フィルムは未詳

絵本

- ㉗菊田一夫作・新谷松忠雄文・井部岐四郎絵『鐘の鳴る丘 絵ものがたり』野菊書房、1948年
㉘菊田一夫作・松田文雄画『絵本 鐘の鳴る丘』1、野菊書房、1948年
㉙横山隆一『長篇エ物語 鐘の鳴る丘』東京新報社、1948年

映画シナリオ

③菊田一夫原作・齋藤良輔脚色『鐘の鳴る丘 トーキーシナリオ』東京書肆、1948年

上記30点中、③「鐘の鳴る丘 (ラジオ・ドラマ) 第一篇・隆太の巻より」(1965年)、⑥「鐘の鳴る丘」(1951年)、⑨『鐘の鳴る丘 第1巻 焦土の少年たち』(菊田一夫、四季書房、1951年)、⑩『鐘の鳴る丘』上・下(1953年)以外の26点は、放送劇進行中の刊行・制作であった。

時期はやや下るが、菊田一夫は、「時計塔の女」(1946年3月7日、13:15~14:00に放送)、「ゼランジャ城の幽霊」(1950年1月6日、20:30~21:15に放送)など、自作放送劇脚本8編を所収した『菊田一夫 ラジオ・ドラマ選集』(宝文館、1951年)を刊行した¹⁰。『菊田一夫 ラジオ・ドラマ選集』所収放送劇は、いずれも放送時間は15分~45分の単発の番組であり、放送劇脚本をそのまま所収したと判断しても許されるだろう。しかし、「鐘の鳴る丘」の1回15分の放送劇脚本を連ねて通読に耐える脚本とするのは、単発ドラマと同じではないことは自明である。菊田一夫は「鐘の鳴る丘」以外の連続放送劇脚本を刊行してはいない。

菊田一夫は、放送劇「鐘の鳴る丘」の一部を「N・H・K連続放送劇より 鐘の鳴る丘」(1948年1月21日~2月2日・2月16日~2月29日、つくし座、日劇小劇場)・「鐘の鳴る丘 信州篇」(1948年7月3日~8月4日、創作座、有楽座)として上演した¹¹。菊田一夫作品の同様の事例は、放送劇「山から来た男」(1945年10月28日~12月9日、19:00~21:00の30分間放送)を「山から来た男」(1946年2月2日~、明朗新劇座・松竹舞踊団、新宿第一劇場)¹²として上演した例があるに過ぎない。菊田一夫は、「鐘の鳴る丘」を2度にわたって舞台劇化したのである。

菊田一夫は、『山から来た男』(松竹出版部、1947年)、『さくらんぼ大将』1~3(宝文館、1951~1952年)、『君の名は』第1部~第4部(宝文館、1952~1954年)などを、放送劇の進行中あるいは終了後に、放送劇脚本を小説に改稿して刊行した。

『山から来た男』などはいずれも小説として完結しているが、小説版「鐘の鳴る丘」(⑦~⑩)は放送劇の一部でしかない。

このように、菊田一夫は「鐘の鳴る丘」の脚本を刊行し、舞台劇として上演し、舞台劇脚本を雑誌に掲載し、放送劇脚本を改稿して小説を刊行し、さまざまな「鐘の鳴る丘」を造りだした。

菊田一夫作品を原作とする映画は、Movie Walker (<http://movie.walkerplus.com>、2013年8月14日に閲覧)、『松竹七十年史』(松竹株式会社編・発行、1964年)、東宝三十年史編纂委員会編『東宝三十年史』別冊(東宝株式会社、1963年)などによれば、「思ひつき夫人」(東宝、1939年5月1日公開、監督: 斎藤寅次郎、脚本: 小国英雄、出演: 竹久千恵子、岸井明、霧立のぼる、花菱アチャコなど)を嚆矢として、少なくとも48本におよんだ。そのうちの15本は、菊田一夫のオリジナル放送劇10編にもとづいており、「鐘の鳴る丘」三部作もその一部をなし

た（巻末に、付表Ⅱ「菊田一夫オリジナル放送劇を原作とする映画一覧」を掲げた）¹³。

他の劇作家と比較するほどの資料は手許にはないが、菊田一夫作品を原作とする映画が少ない方に属するとも考えられない¹⁴。

このほかにも、紙芝居・幻燈台本・絵本などが刊行されたが、菊田一夫が刊行に関与した事例は、横山隆一『長篇エ物語 鐘の鳴る丘』（東京新報社、1948年）に「はしがき」を寄せている以外には見当たらず、これ以外は不分明と記すほかない。

以下にその「はしがき」を引いておく。

「鐘の鳴る丘」を横山隆一さんが画にして下さるときいて、私はとびあがってよろこんだ。私の知らない間に「鐘の鳴る丘」を汚ない漫画の本にして出したところがあったので、私は気持ちをくさらせていたところなのでした。

横山さんの絵筆によって描かれた、隆太や俊次やみどりや、そしてやさしい修平兄さんは、みなさまのところにむかって、私のほんとうの気持ちをたずさえて「こんにちは、仲良くしましょうね」とおたずねしてゆくことでしょう¹⁵。

横山隆一が執筆した「あとがき」（96頁）は、以下のとおりである。

……聴取者に兎に角問題になっていると云う この「鐘」を 私が今度 漫画にするについて 私は 大変 まごつきました。音だけの世界である ラヂオの放送を 画にするので原作と ちがうものとなりはしないか 菊田先生 の意図するものと 離れて 鐘の鳴らぬ丘に なりはすまいか。

「横山君の鐘の鳴る丘」にして下さいと、菊田先生に言はれると尚のことむつかしいのです。二巻、三巻、あたりに なんと 私の 人馴れで そろへ 母屋を荒らしたいと思っています。第一巻は子供よりお母さんの眼をうかがい過ぎた感で ございます¹⁶。

筆者に横山隆一の挿画を評することはかなわないが、横山隆一が描いた浮浪児・戦争孤児は、は、檻樓・蓬髪・裸足であり、人物の個性を描き分けており秀逸である。文章も横山隆一が執筆した。横山隆一の「あとがき」は、菊田一夫の「はしがき」と照応し、二人の力量が共鳴している。

菊田一夫が指摘した「汚い漫画の本」が、何を指しているのかは不詳である。また、横山隆一が述べた「二巻、三巻」、すなわち続編の刊行は、有無も含めて不詳である。

先に述べたように、菊田一夫作放送劇では、「鐘の鳴る丘」のみが、舞台劇上演・放送脚本刊行・小説への改稿・映画など多様なヴァージョンに変容をとげた。

その意味では、「鐘の鳴る丘」は特異な放送劇であった。

これ以降は、放送劇とそのヴァージョンを区別するために、放送劇「鐘の鳴る丘」と記すこととする。

3. 本研究の課題

管見の限り、放送劇「鐘の鳴る丘」のヴァージョンに関する先行研究は見当たらない¹⁷。

筆者が検討対象とするのは、放送劇「鐘の鳴る丘」の一過性を打破するとともに視覚化に与った、菊田一夫自身による脚本（放送台本）刊行、舞台劇脚本への改稿と上演、原作者としての関与に限定されるものの、同時期公開映画と多少の比較が可能な映画である。

放送劇「鐘の鳴る丘」の多様なヴァージョンは、繰り返して聞くことがかなわなかった放送劇の一過性を打破し、舞台劇・映画は放送劇の一過性打破に加えて、「浮浪児と暴力団の現実」を視覚化する役割も果たした。脚本・小説の刊行は、文字から放送劇を想像する手段を提供した。いずれも放送劇と重なりながら、読者・観客の新たな拡がりを作り出した。「鐘の鳴る丘」脚本（放送台本、NHK 放送博物館所蔵）の閲覧は可能だが、人びとが手軽に読めるというものではない。したがって、放送劇「鐘の鳴る丘」のヴァージョンは、今日では放送劇「鐘の鳴る丘」を共有するための資料でもある。

とはいえ、放送劇「鐘の鳴る丘」のヴァージョンは放送劇脚本をそのまま、あるいは部分的に写し取って作成したのではない。菊田一夫は、放送劇脚本の刊行に際し、放送劇脚本を舞台劇として上演するために、放送劇脚本を大幅に改稿したからである。

放送劇「鐘の鳴る丘」のヴァージョンを検討対象とすることは、菊田一夫が舞台劇を上演し、その戯曲「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」を公刊した際に述べた「「鐘の鳴る丘」は、あくまで連続放送劇「鐘の鳴る丘」が主であつて、その他は、そこから派生した枝葉にすぎない……（台本）を一回目から全部御読みになったとしても、この放送劇の正確なる全貌がお分かりになる筈がありません。……放送劇の価値を定めるものは、あくまでも、文字ではなく、音だからです」¹⁸という立場に異議を唱えることになる。

しかし、菊田一夫は放送劇「鐘の鳴る丘」から「派生した枝葉」の意義、それも「舞台劇」に限ってだが、こうも述べている。

（空中に消え去つてしまつて、影も形もない）放送そのものの悲しくあっけない宿命の中で、せめてものの形をなして、此の世に残る、その枝葉であるところの舞台劇、やはり、可愛いと思います。たとえそれが、実際の「鐘の鳴る丘」の片手にしかすぎず、片足にしか過ぎないとしても¹⁹

本研究では、①～⑭までを俎上に乗せ、放送劇「鐘の鳴る丘」脚本と対比しながら、菊田一夫が放送劇「鐘の鳴る丘」の一部を切り取って、放送劇とは異なる「鐘の鳴る丘」を作り出したことを究明する。放送劇の最終回には届かないままに終わってしまったヴァージョンの検討は、かえって放送劇「鐘の鳴る丘」で菊田一夫が希求した「大人になりかかった浮浪児・戦争孤児の自活」を剔出することになるはずである。

筆者は、「浮浪児救済のためのキャンペーン・ドラマ」²⁰、「復員した青年・修平が、感化院を逃げ出した弟の修吉を捜して訪れた東京・新橋のガード下で、カバンを盗もうとした浮浪児の隆太に出会う。彼らを幸せにしたいと思う修平は、故郷の信州に孤児らが暮らせる「少年の家」

をつくろうと、隆太やその仲間、修吉らと力を合わせる」²¹との如き、放送劇「鐘の鳴る丘」のステレオタイプな概括を打ち壊してみたい。

I 連続放送劇「鐘の鳴る丘」が一世を風靡したということ

1. 連続放送劇「鐘の鳴る丘」・主題歌「とんがり帽子」の拡がり

高山英明・斎藤次郎は、放送劇「鐘の鳴る丘」は「戦後の児童文化史を考えるうえで、いくつかの重要な指標を提起している」として、「音響効果の処理や音楽の使用法」とともに、NHK「演芸部」の関与をあげている。

「鐘の鳴る丘」は、「子どもの時間」とはまったく別個に、演芸部が制作を担当し、土・日を除く毎日一五分の帯ドラマとして放送された。そして、闇市・浮浪児・暴力団など敗戦直後の荒廃した世相をドラマに織りこみ、おとなの聴取者の関心を強くとらえ、「子どもだまし」の排除がまた子どもたちの心をも強くひきつけたのであった²²

NHK 第二放送午後8時以降あるいは午後10時以降の、放送劇「鐘の鳴る丘」の再放送は、強かったという「おとなの聴取者の関心」への対応でもあった²³。

阿久悠は、『ラヂオ』で、1947年に兵庫県淡路島の国民学校5年生であった合田走に、放送劇「鐘の鳴る丘」と主題歌「とんがり帽子」について、こう言わせている。

『鐘の鳴る丘』は学校でもすぐに評判になった。特に「とんがり帽子」の歌は明るく歌いやすく、何かというところが立てて歌っていた……（校長が「俺らが教育的な言葉でない」と歌うことを禁止したので）「俺らがあかんのやったら、わいらにしようやないけ」といい、……「ほなら、女の子は、わてらの家よと歌うたらええ」と……大騒ぎになった。……『向う三軒両隣り』はどこの家にも起こるようなことを放送劇にする驚きであったが、『鐘の鳴る丘』は東京の戦災孤児たちの話で、語られることのすべてが刺激的であった。現実が恐くもあった。しかし、劇としては、どうなるのだろうかという興味があった²⁴（圈点は原文）

阿久悠は、1947年3月末にはラジオの普及率は40.6%に過ぎないという状況下で、10歳前後の少年少女たちは、校長が禁止した主題歌「とんがり帽子」を、学校で熱唱していたことを描出した²⁵。「とんがり帽子」は、学校で児童を介して拡がりをみた。そこには、放送劇「鐘の鳴る丘」を知らずにいた子どもたちもいたはずである。

NHK 放送文化研究所が、1950年1月に4,848名を対象に実施したアンケート調査では、放送劇「鐘の鳴る丘」を聴いたことがあるのは89%、毎日聴いているのは25%、時々聴いているのは51%であった²⁶。

放送劇「鐘の鳴る丘」が一世を風靡した証左に、第76回（1948年3月28日）までは毎週土・

日曜日の夕方(15分間)であった放送時間を、第77回(1948年4月1日)以降は毎週月～金曜日(15分間)へと拡大したという例をあげておく²⁷。放送時間延長を求める投書は、放送開始直後から多かったのである²⁸。

一方、菊田一夫は自嘲と憤懣を込めて、放送時間延長について次のように記している。

(約束の半年間の)終結間際になって……ハギンス〔CIE ラジオ課〕氏の許に呼ばれ、「鐘の鳴る丘」を毎週五日間五回にして、あと数年間或いは無限に継続することを懇談的に申し渡されました²⁹(圈点は原文)

長期にわたる放送は、聴取者の関心の高さと占領軍(CIE)の意向によっていた。

高山英明・斎藤次郎は、「おとなの聴取者の関心を強くとりえ、……子どもたちの心をも強くひきつけた」と述べる一方で、「聴取者の支持に支えられてというよりも、占領軍当局の指示によって、長期継続を強制されたものだった。そのため作者自身もしだいに主体的作家精神を失い、たんなる娯楽番組に変質していくのである」とも述べている³⁰。

「強制された」のに、「主体的作家精神を失い、たんなる娯楽番組に変質していく」と述べるのは、菊田一夫には相当に酷である。「たんなる娯楽番組」との指摘も、北海道に「少年の村」を建設して、「大人の年齢」にさしかかったかつての浮浪児・戦争孤児の自活の途を見出そうとした、放送劇「鐘の鳴る丘」の展開に照らせば的外れである。

主題歌「とんがり帽子」の流布は、第一回選抜高等学校(新制)野球大会(1948年4月1日～6日)入場行進曲が「とんがり帽子」であったことによく現れている³¹。

1948年2月のNHKへの投書では、音楽と文学作品朗読を内容としていた「お休み番組」(日曜日～土曜日、午後10時台の10～15分間)への「音楽は各層からの注文」が多く、「鐘の鳴る丘」では……主題歌を求める手紙が多くなっている³²という。

1948年4月8日付『読売新聞』(朝刊)が載せた投書「浮浪児を救え」は、「上野駅付近に行つてみると六歳から十歳位までの幼い浮浪児が隊を組んで立ち並び、乗客の前で「鐘の鳴る丘」の歌をうたっている」³³と述べている。また、1948年5月14日付『読売新聞』(朝刊)は、5月13日、「台東仲よし子供会」の小学生30余名は、シベリヤからの復員兵679人が北海道東北方面へ発つ上野駅で発車を待つ間に、「鐘の鳴る丘」の合唱や舞踊で「一同を慰めた」と報じている。合唱した「鐘の鳴る丘」の歌とは、いうまでもなく主題歌「とんがり帽子」である。

「とんがり帽子」は、浮浪児・戦争孤児が歌えば物乞いの、台東仲よし子供会が歌えば復員兵慰労の歌であった。歌っているのは子どもだが、いずれにも何らかの組織が介在していたことは確かであろう。上野駅あるいはその周辺で子どもたちが歌った「とんがり帽子」は、淡路島で合田走たちが歌ったのとは異なり、「お休み番組」へのリクエストと同様に、「大人が聴く」ための歌に変容していた。

主題歌「とんがり帽子」の拡がり、放送劇「鐘の鳴る丘」の聴取とは別の契機によってい

る場合もあった。

福島信用金庫が 2009 年 10 月 26 日に実施した「古閑裕而：思い出のメロディミニ作文コンクール」入選作（発表は 2009 年 11 月 6 日）のひとつは、「鐘の鳴る丘」「とんがり帽子」の思い出」であった。

読みながら先生が泣いた。聞いている私たちも目をまっ赤にして涙をこらえていた。山の小さな小学校のひとつ、鐘の鳴る丘の紙芝居に教室は静まりかえっていた。先生は、読み終わるとピアノを弾きながら「とんがり帽子」を歌ってくれた。悲しみをこらえた明るく美しい歌声に魅了されて私はすぐに憶えてしまった。昭和二十三年、小学校一年のその年、私は父を亡くした。

苦しい生活に耐えながら、母はいつも私達姉弟を、「いつか必ずいい日が来る」と励ましてくれた。その言葉を小さい胸に言いきかせながら、子羊の群れのように肩を寄せ合って生きる私達姉弟に、とんがり帽子の歌は珠玉の希望を与えてくれた。「昨日にまさる今日よりも、あしたはきっとしあわせに」明るく郷愁に満ちたあのメロディはその後の私の幾多の人生の途上に、あの時の思い出とともに限らない希望を与えてくれている³⁴。

作者が引いている「昨日にまさる今日よりも、あしたはきっとしあわせに」は、「とんがり帽子」の 4 番の歌詞の一部である。「父を亡くした」と記す作者の意を理解するために、3・4 番の歌詞を掲げておく。

とんがり帽子の 時計台／夜になったら 星がでる
鐘がなります キンコンカン／おいらは帰る 屋根の下
とうさんかあさん いないけど／丘のあのまど おいらの家よ

おやすみなさい 空の星／おやすみなさい 仲間たち
鐘がなります キンコンカン／きのうにまさる 今日よりも
あしたはもっと しあわせに／みんな仲よく おやすみなさい³⁵

この作文では、「とんがり帽子」は放送劇「鐘の鳴る丘」の主題歌ではなく、紙芝居で観た「鐘の鳴る丘」の歌であった。主題歌の拡がり方も多様であった。

2. 「東京哀詩」・「鐘の鳴る丘」——菊田一夫の自作評——

放送劇「鐘の鳴る丘」は、主題歌「とんがり帽子」とともに「一世を風靡した」としても、菊田一夫の「自作評」を踏まえておくことは、放送劇「鐘の鳴る丘」のヴァージョンを考察するうえで多少意味はあるだろう。

既に放送劇「鐘の鳴る丘」が、「歴史」になりつつあった時点での菊田一夫の発言、すなわち 2005 年 9 月 18 日、NHK 教育テレビが放送した「あの人に会いたい 「君の名は」原作者」(19 :

45～19:55、「NHK アーカイブス NHK 映像ファイル あの人に会いたい」No.059)において、尾崎宏次と対談している菊田一夫の発言を取り上げよう。

「あの人に会いたい 「君の名は」原作者」は、「劇作家としての菊田一夫を不動のものとしたのは、終戦後に書かれたラジオドラマ「鐘の鳴る丘」「君の名は」……」とのナレーションで始まる。

尾崎宏次が「「鐘の鳴る丘」は戦後のものですね。あの時代に日本の子どもを書く前提があったんですか」と尋ねたのにたいして、菊田一夫は以下のように応じた。

「鐘の鳴る丘」の前に書いたのは「東京哀史」なんですよ。

それでなぜ書いたかというと、僕はその頃田園調布に住んでたんだけど、なんか冬なのに素っ裸の子どもが、その東横電車の僕が乗ろうといるとね電車の田園調布のホームでまごまごしてんのよ。それが小突かれちゃてき、みんなさ可哀想なの。

それで僕が「どこだい」と言ったら、「新橋のガード下だ」と言うので、連れて行ってやろうと。しょうがないから金払ってやってね。それで何か話し合ってる間にいじらしいんだよね、感じがね。それでつまり、この子どもが大きくなったときどうなるんだろうかと思ったわけよね。

そのころの浮浪児の生態を見ているとき、つまりもう10何年かあるいは20年ぐらいのちは、日本中強盗だらけになるような気がしてきちゃったんだよね³⁶

尾崎宏次が「あの時代で子どもを書く前提があったんですか」と質問したのに対して、菊田一夫は放送劇「鐘の鳴る丘」の前提ではなく、「東京哀史」を執筆した「前提」を話した。

この番組では「東京哀史」に一切の解説を付さなかったが、「東京哀史」は、菊田一夫が薔薇座(千秋実主宰)の求めに応じて1946～1947年に執筆した戯曲「東京哀史」(1947年1月12日～1月25日、日劇小劇場で初演、千秋実・佐々木踏絵などが出演、演出は佐々木孝丸)である。「東京哀詩」は、舞台上演のさなかの1947年1月22日に、薔薇座が出演して放送劇「東京哀詩」として放送されてもいるが、菊田一夫が尾崎宏次に応じて「東京哀史」について述べたとき、それは薔薇座公演のための舞台劇戯曲のことであった。

西村晋一は「東京哀詩」について、「舞台の成果も、作者にとって「花咲く港」以来の問題作、佳作として注目を集めた」と述べている³⁷。

繰り返すまでもなく、「あの人に会いたい 「君の名は」原作者」の趣旨は、放送劇の「鐘の鳴る丘」と「君の名は」が、「劇作家としての菊田一夫を不動のものとした」という点にあったが、これは菊田一夫の矜持とは異なっている。

やや横道へそれるが、1966年に菊田一夫は帝国劇場で上演した自作で「世間の評判となった作品」に「モルガンお雪」(1951年)・「ジャワの踊り子」(1952年)とともに「花咲く港」(1943年3月5日～3月26日、古川緑波一座)をあげながら、次のように述べている。

「花咲く港」は昭和十七年に内閣情報局から執筆を依頼された作品(題材は作者の自由)

で、私としては珍らしく、出演者の宛てもなく書いた作品であった。……前半ガラガラの不入りだったが、その内に芝居を見た観客の口宣伝が利いたのか、十一日目からは爆発的な入りとなり、千秋楽まで超満員の入りが続いた。

「花咲く港」は、木造船増産という戦時中の国策推進劇ではあったが、同時に、それまでの日本演劇になかった型の正当喜劇だったとかで、これは私のいわゆる出世作となったものであった³⁸。

西村晋一は、「この高名な作品」と呼んだ「花咲く港」は、敗戦後もたびたび上演された³⁹。

菊田一夫は戦災孤児・浮浪児を描いた、銭湯の女湯ががら空きになったと、常に「鐘の鳴る丘」と「君の名は」に結びつけられる。しかし、「あの人に会いたい」「君の名は」原作者では、菊谷一夫は「東京哀史」を知っている視聴者は稀であることを承知のうえで、放送劇「鐘の鳴る丘」ではなく戯曲「東京哀史」を著した「前提」を述べて、尾崎宏次の質問には直接答えようとはしなかった。

誤解を恐れずに記せば、「劇作家としての菊田一夫を不動のものとしたのは、「終戦後に書かれたラジオドラマ『鐘の鳴る丘』、『君の名は』……」だというナレーションは、NHK の「我田引水」か誇張である。菊田一夫は、菊田一夫＝「鐘の鳴る丘」・「君の名は」という固定的イメージに抗った。

1930 年代から続いている劇作家としての蓄積の画期に、放送劇「鐘の鳴る丘」、「君の名は」がおかれることに、放送劇の作家であったが、それ以前もそれ以後も舞台劇の作家であった菊田一夫は肯んじていない。

Ⅱ 連続放送劇「鐘の鳴る丘」の構成

1. 放送劇「鐘の鳴る丘」の主な登場人物

NHK 放送博物館が所蔵している菊田一夫旧蔵連続放送劇「鐘の鳴る丘」脚本（放送台本）（1947 年 7 月 5 日：第 1 回～1950 年 12 月 29 日：第 790 回、謄写版印刷、菊田一夫直筆原稿・古関裕而旧蔵本からの複写を含む）から摘記した放送劇「鐘の鳴る丘」の主な登場人物は、以下のようである。

加賀見修平（長野県穂高町に暮らす復員兵、「少年の家」設立者）、加賀見修吉（修平の弟、感化院脱走者、浮浪児）、岸枝（修平らの母）、桂一（感化院脱走者、浮浪児）、隆太・留男・俊次・謙一・みどり・ガンちゃん・カラス（東京の浮浪児）、秦野由利枝（修平の協力者）、秦野豊（町長、由利枝の父）、トキ子（大阪の浮浪児）、クロ（水沢等、レビュー団員）、加賀見勘造（修平・修吉の伯父）、かね（その妻）、まき子（勘造・かねの子）、昌夫（同）、しの（勘造の使用人）、長沢美也子（「少年の家」指導員）、泉沢万次（山案内人）、龍太（万次の子）、立花（強盗犯、脱獄囚）、たか（隆太の母）、山田（暴力団山田一家親分）、瀬川俊春（山田一家子分、ガ

ンちゃんの兄)、芳松(山田一家子分)、トキ子の両親、桜井(参議院議員)、真喜(クロの母)、水沢源二(強盗団長、クロの父)、細谷かなえ・坪寺作三・一本足・口笛(強盗団一味)

2. 放送劇「鐘の鳴る丘」の概要

放送劇脚本(台本)にもとづいて放送劇「鐘の鳴る丘」の概要をまとめるなら、以下のようになろう。()内は回数。

〔1〕1947年7月5日(1)～12月28日(52)

①1946年夏、修吉・桂一は感化院から脱走。加賀見修平は弟の修吉を探すために上京し、新橋駅へ降り立つ。修平は浮浪児隆太に鞆を奪われたのを機に、隆太を食堂へ誘うが、店主に入店を拒否された隆太は、怒って店の金を盗んで逃げ、修平が警察に逮捕される。それを知った隆太は、警察署前で釈放を待つ。スリの手助けをしている隆太・留男・謙一・俊次・みどりら浮浪児に、長野県穂高町で一緒に暮らそうと誘い、まず隆太と帰郷する。信州へ向かうはずが青森行列車に乗った修吉は、車掌・乗客に咎められ岩手県水沢辺りで窓から飛び降りた。大怪我をして立花に助けられ、手術を受けるが脚は不自由になった。

②修平は勘造に浮浪児の養育を拒否され、隆太は家出した。修平は亡父の土地を開墾し、由利枝・しのの協力、秦野の寄附を得て「少年の家」を建てた。隆太は山中で出会った万次・龍太親子と、拾った鐘を携えて修平の元に戻って来た。

③修平は上京して、みどりたちにスリの手助けをさせている山田一家に掛け合い、金を要求された。用意した金をすられ、さらに用意した金も隆太が運んでいる途中に昌夫に盗まれた。警察から逃れようとした立花は死亡した。修吉は水沢から上京する途上で所持金を騙し取られ、東京で靴磨きの浮浪児となったが、新聞売りの老婆に助けられ、桂一とともに信州の兄の元へ向かった。

④修平は山田一家からみどりたちを連れ帰ろうとして袋だたきにあうが、子分瀬川が修平の宿へ来て、弟ガン・謙一・俊次・みどりを彼に託した。窃盗が露見した昌夫は山へ逃げ、偶然出会った修吉を崖下へ突き落とした。吹雪のなかで修平は修吉を助け上げ、ようやく兄弟は再会した。「少年の家」で祝っているクリスマス・パーティーには昌夫も参加した。

〔2〕1948年1月10日(53)～8月14日(176)

①隆太は母が吹いていた曲に誘われ、ガン・みどりと「少年の家」を出た。ふたりを途中で逃がした隆太は山田一家が差配するレビュー団で母と暮らす。前後して「少年の家」に暮らすようになったクロは「少年の家」の妨害行動に走る。秦野は暴力団の脅迫を受けた。いずれも、殺人罪で刑務所に送られた山田親分の差し金であった。心臓弁膜症を患っているクロは、看病する修平らにうち解けて、資金調達のための音楽会を中心的に担う。ガン・みどりは雪崩に遭うも無事帰還する。

②トキ子ら20人以上の浮浪児が「少年の家」に現れた。山田一家の報復を恐れて大阪へ逃れた瀬川の勧めである。しのはトキ子の両親を探しに兵庫県芦屋へ。芳松は瀬川を大阪から連れ帰

って殺害し、罪を隆太になすりつけた。たかから隆太の逮捕を聞いた修平・留男は、街の浮浪児たちの協力で目撃者を探し出し、冤罪を晴らした。

③「少年の家」の資金を集めるために、長野市で音楽会を開催したが、山田一家の意を受けた暴力団の妨害にあう。会場でトキ子は両親と再会して郷里へ帰る。留男は桜井参議院議員の養子となった。

〔3〕1948年8月17日(175)～12月31日(273)

①1948年8月、「少年の家」の子どもは98人となった。秦野は、トンネルを掘って伐採した材木を運搬するルートを短縮する計画を立て、「少年の家」の子どもたちが工事に従事するが、ここでも暴力団の妨害にあう。「少年の家」にもなじめずに山奥で熊と暮らしているカラスは、工事妨害者たちに立ち向かって亡くなり、工事は完成した。

②修吉の母岸枝が信州へ現れ、その存在を知った修吉は「少年の家」を出てしまう。修吉は、岸枝が既に別の家庭を持っていることを知って立ち戻ってきた。

③1947年のクリスマスには35人、1948年には127人が集まった。

〔4〕1949年1月4日(274)～5月31日(379)

①修平たちは、青梅線奥多摩駅から3里の地に「少年の家東京支所」を建設した。クロは、「東京支所」で暮らす子どもたちを連れ戻そうとするスリの親分・板倉に抗議して、リンチに遭うが、正木五郎(麻葉常習者)・カツミ夫婦に助けられた。クロは囹となつて、警察が板倉達を逮捕するのに協力した。

②修平は、修吉の脚を手術することにした。東大病院での手術は成功し、修吉はリハビリに励むが、不安にかられて松葉杖を手放すことができない。

〔5〕1949年6月1日(380)～1950年1月6日(536)

①クロは、サーカスの元ピエロ・大助から母親が北海道小樽市にいと聞き、北海道へと向かった。クロは修吉が世話になった岩谷堂及政旅館を訪ね、近くの山中で銃に斃れた常公から「黒革の手帳」を託された。クロは函館の宿で放火に遭う。小樽に着いたが、母は既に根室と知る。クロは坪寺作三に襲撃された。放火・襲撃はいずれも財宝隠し場所を記した手帳が狙いである。手帳を狙う強盗団団長は水沢源二、クロの父である。

②岸枝は修吉に会いに大阪から上京した。車にはねられそうになった母を助けようと、修吉は松葉杖を放り出して駆けだし、歩けるようになる。

③隆太は、クロの母が「東京支所」に来たことを伝えるために北海道へ向かい、修平・ガンちゃん・みどり・俊次も後に続いた。舞台は札幌時計台・豊平町月寒・屈斜路湖^{くつしゃろ}などへと移り変わる。

④クロは、強盗団隠れ家(阿寒の地下洞窟)で水沢源二と対決。やがて水沢源二は逮捕された。クロは屈斜路湖畔のコタンで母と再会する。

〔6〕1950年1月7日(537)～4月28日(615)

①修平は美幌峠で「少年の家北海道支所」建設を決意し、原始林の払い下げを受けた。

②「少年の家」から48人の「少年開拓団」は、組立て式の幌馬車を用意して、東京芝浦を発って釧路港に上陸する。^{おたのしけ}大楽毛で馬を購入して15台の幌馬車隊は強盗団残党の妨害を受けながら、開拓地に到着し、ただちに道路開削に取りかかり、やがて「少年の村」を完成させる。勘造・秦野町長らも駆けつけ、広場の会館で修平・由利枝の結婚式が行われた。囚人伐採作業中の水沢源二が、「とんがり帽子」の合唱を指揮しているクロを遠望している。

これが筆者が題名と主題歌を知っていたが、内容の一切を知らずにいた放送劇「鐘の鳴る丘」の概要である。

3. 放送劇「鐘の鳴る丘 白樺人形の巻」の主な登場人物と物語の概要

「鐘の鳴る丘 白樺人形の巻」の主な登場人物と物語の概要も掲げておく。

【主な登場人物】

島崎裕子（出征した父の帰還を待つ中学生）、郁江（裕子の母）、俊造（時にキリシマ、裕子の父）、市電車掌（息子がニューギニアで戦死）、袖木（裕子の学級担任）、みどり（「少年の家」に暮らすかつての浮浪児）、溝呂木彦八（みどりの祖父、元枢密顧問官）、冴子（みどりの母）、修平・隆太・俊次・クロ（「少年の家」「少年の村」に暮らすかつての浮浪児）

【物語の概要】

〔1〕1950年5月1日(616)～8月28日(701)

①舞台は1949年春、東京。島崎郁江・裕子母娘は、1943年に出征したまま未帰還の俊造を待ちわびながら、郁江の造花内職で暮らしている。帰還船を迎えに既に4度も鹿児島まで出かけ、生活は困窮している。裕子は14歳である。郁江に親切にしてくれた市電車掌は、「みどり」と記された白樺人形を所持。郁枝に代わって造花を売りさばき、浅草の甘栗屋で働きながら通学する裕子を袖木は親切に励ます。

②裕子は近所の春山大吉・ケイ子が捨てた白樺人形を拾う。人形は信州穂高「少年の家」の子どもらが作成したもの。元枢密顧問官溝呂木彦八は孫のみどりを探しているが、娘冴子は空襲で死に別れたと確信している。

③裕子・郁江の境遇に同情した彦八は、裕子に屋敷で暮らすように勧める。

〔2〕1950年8月29日(702)～12月29日(790)

①1950年春、郁江・冴子は、裕子には音楽の才能があると考えピアノを習わせ、やがて彼女は作曲の天分を発揮する。冴子・彦八はみどりと会い、みどりが祖父の名を記憶していたことから空襲の際に生き別れになった娘と確認。みどりは冴子らと同居し、小学校へ通うこととなった。キリシマと名乗る記憶喪失の復員兵は俊造と判明した。

②彦八は「少年の家」へクリスマス招待状を送り、長野からは修平、北海道支所からは隆太・俊次・クロたちが参集した。

③年末に開催された新聞社主催全国少年少女のための音楽コンクールで、裕子はコンチェルト

「みどりちゃんと鐘の鳴る丘」を発表し喝采をあげた。俊造も参加して記憶が戻り、舞台の裕子を認める⁴⁰。

筆者が行論の夾雑物になるのを承知で、放送劇「鐘の鳴る丘」の概要を記しておくのは、放送劇「鐘の鳴る丘」のヴァージョンは、⑭『鐘の鳴る丘 第三篇 クロの巻』以外は、1947年12月28日（第52回）までを描いているに過ぎず、「鐘の鳴る丘 白樺人形の巻」に言及した文献も見当たらないからである。

そもそも、菊田一夫の仕事を最もよく「理解」している人々であっても、放送劇「鐘の鳴る丘」の内容を正確に書き記していない。

一例をあげれば、小幡欣治は『評伝 菊田一夫』において、放送劇「鐘の鳴る丘」に関連して163～169頁を割いているが、内容については以下のように述べているに過ぎない。

物語は、感化院を逃げ出した浮浪児の修吉を探して、復員した兄の修吉が焼跡を訪ねてくるところから始まる。ところが、同じ浮浪児の隆太に鞆を奪われそうになるが、修平はとがめたりしないで、逆に隆太のいじけて、かたくなな心をほぐしてゆく。やがて修平と浮浪児たちは、力を合わせて信州に少年の家を建てる、というのが主なストーリーである⁴¹

小幡欣治の概括では、物語の順序が放送とは異なっている。放送劇「鐘の鳴る丘」は、東京の郊外で少年たちがベーゴマ遊びに興ずる場面から始まっている。修平は感化院から弟を引き取るために上京し、感化院で弟の脱走を知り、弟を探しに新橋に行き隆太と遭遇したのであり、修平らが信州に「少年の家」を建てたのは第29回（1947年10月11日）である。

先に概略で示したように、第53回（1948年1月10日）以降は、「たんなる娯楽番組」と揶揄されたように、少年たちが隆太の冤罪を晴らすために暴力団に立ち向かい、阿寒の地下洞窟に隠されている財宝を巡って強盗団と闘うというたぐいの荒唐無稽なエピソードの連続であった。

しかし、放送劇「鐘の鳴る丘」は、浮浪児・戦争孤児の母を探し当て、裕福な養父母と縁組みして新たな家族を造り、北海道に「少年の村」を建設して自活の方途を指し示す1950年4月まで延々と続いた。

しかし、多言を要すまでもなく、小幡欣治の概括は、615回の放送劇「鐘の鳴る丘」の29回分しか踏まえていない。ましてや、「鐘の鳴る丘 白樺人形の巻」（第615回～第790回）には一顧だにしていない。

Ⅲ 放送劇脚本の刊行

1. 『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』・『鐘の鳴る丘（第二篇 信州の巻）』と連続放送劇「鐘の鳴る丘」

放送劇「鐘の鳴る丘」の音楽をほぼすべてを担当した古関裕而は、「放送は生放送で、それと

同時に十六インチの円盤に録音してCIEにきかせ、担当米人が、あれこれ指摘し、次週番組の参考にした⁴²と述べているが、録音記録はNHK放送博物館所蔵MD版以外には、有無も含めて未詳である⁴³。「鐘の鳴る丘」の多様なヴァージョン」に掲げた⑮～⑱のSPレコードの録音時間は3分17秒～3分29秒に過ぎずない⁴⁴。したがって、放送劇「鐘の鳴る丘」全体の再聴取は不可能である。

他方、放送劇「鐘の鳴る丘」の脚本（放送台本）は、刊行されてはいない。

ところが、菊田一夫は①『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』、②『鐘の鳴る丘（第二篇 信州の巻）』は、放送脚本だと述べている。

菊田一夫は、『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』に付した「まえがき」で、次のように述べている。

これは、昭和二十二年七月五日以来放送をつづけている連続放送劇「鐘の鳴る丘」の、放送脚本です。

この放送劇に対して、是非の論が相当にはげしくくりかえされましたが、作者としては、終りまでよくきいていただきたい。しかも、一度や二度でなく、よくきいて、内容をがん味していただきたいと言うより他にはありません⁴⁵

「これは、放送脚本をそのまま活字にしたもの」とも述べている⁴⁶。

果たしてどうであろうか。

菊田一夫が「放送脚本」だと述べているとおり、『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』は、第1回～第19回途中まで、『鐘の鳴る丘（第二篇 信州の巻）』は第19回（途中）～第38回までと第42回の「放送台本」を踏まえている。

「踏まえている」と記すのは、両書は連続放送劇「鐘の鳴る丘」の脚本とは異なっているからである。試みに菊田一夫が用いた第1回脚本と、菊田一夫『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』の第1回放送相当箇所を比較する。

【事例1】

放送脚本「昭和二十二年七月五日／連続放送劇 鐘の鳴る丘（1） 菊田一夫／NHK放送台本」（菊田用）の冒頭は、以下のようである。

音楽 （鐘の鳴る丘のテーマソングの前に必ず入れる鐘の音）
子供たちの合唱（一節）
（終わってテーマ音楽流る）

アナ 菊田一夫作連続放送劇「鐘の鳴る丘」第一回

アナ 此の連続放送劇は、毎土日の此の時間に放送致します。世の中にワルイ少年は居ないと信じてゐる賀々見修平が不良になりかかっている彼の弟修吉や弟と同じ様に不良になりかかっている少年たちをどう云ふ風にしてよい子供たちにしたかについてのお話であります。では連続放送劇「鐘の鳴る丘」

音楽（音楽終ル）

解説 此の話は東京に郊外のある町角で初まる。

昭和二十一年の夏、七つか八つ位の三人の少年たちが遊びに夢中になってゐた。

「効果」「街の雑音、遠い人声」⁴⁷

これに対して『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』の冒頭（第一回放送相当箇所）は次のように始まっている。

音楽（テーマ）

テーマソング（子供たちの斉唱）

同（T.F）

同（F.I……劇への導入……H.U）

解説 昭和二十一年の夏、東京のある郊外の町。……ひるさがりの熱い風の吹く軒下で、二三人の子供たちが、ベエゴマ遊びに夢中になっていた。

音楽（効果へC.F）

「効果」「街の音……時折りトラックなどが通る」⁴⁸

【事例2】

上記放送脚本の末尾にある「解説」には以下のようにある。

解説 その頃、東京へ向つて走つて来る夜の汽車の中に、修吉の兄、賀々見修平が乗っていた。彼は、つい半月ほど前に南支から復員して来たばかりである。

…彼は弟の修吉を探しに東京へ向つてゐるのである。…その車中で偶然にも一人の女性と知り合ひになった。⁴⁹

この「解説」に修平と由利枝の会話が続く。さらに、「私は弟を信じてゐる」此の言葉を聞いて今晚の菊田一夫作連続放送劇「鐘の鳴る丘」を終わります。修平の弟が感化院から逃亡したことを聞いたらどんなに嘆くことでせう……」と続き、配役・合唱者・スタッフを紹介し、「では又明日の此の時間まで左様なら／音楽（テーマ終る）」で終わる⁵⁰。

これに対して『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』の同様の箇所は次のようである。

解説 その頃、東京へ向つて走つて来る夜の汽車の中に、修吉の兄、賀々見修平が乗っていた。彼は、つい半月ほど前に南支から復員して来たばかりである。（汽笛が鳴る、汽車は走りつづける）⁵¹

第1回放送脚本と『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』の第1回相当箇所を部分的に比較しただけで、以下のような違いが鮮明となる。

『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』には、放送では毎回繰り返えられる番組名・配役などの紹介・次回への案内はない。「解説」とナレーションも大幅に省略した。その結果、『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』では、放送劇「鐘の鳴る丘」に込めた作者の意図は、不分明になった。登場人物一覧（配役）

の表記はない⁵²。

なお、放送脚本例引箇所の下線部は青色鉛筆による菊田一夫の加筆である。加筆前の放送脚本では、前触れなしに修平と由利枝が会話を交わすが、菊田一夫は由利枝を無理なく登場させるために、ふたりの邂逅が偶然であるとの説明を加筆したのである。

効果音の指示も、放送劇である以上些事とはできない。

既に明らかなように、『鐘の鳴る丘 (第一篇 隆太の巻)』は、菊田一夫が述べたように「放送脚本をそのまま活字にした」のではない。

連続放送劇には、毎回の終了間際に次回へとつなげる台詞や解説が必要だが、『鐘の鳴る丘 (第一篇 隆太の巻)』・『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』には必要がない。第5回(1947年7月19日)脚本にある冒頭の呼びかけも、第17回(1947年8月30日)脚本にある第二放送における再放送の案内も必要がない。いずれも省略に無理はない。

それでも、第10回(1947年8月3日)放送脚本、第24回(1947年9月21日)放送脚本にはあり、『鐘の鳴る丘 (第一篇 隆太の巻)』・『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』では省いてしまった、修平の慨嘆と怒り、「死のうと思っている」浮浪児隆太の内面を描いたナレーションを、菊田一夫の聴取者と浮浪児・戦争孤児への呼びかけとして、ここに掲げておく価値はある。

【修平の慨嘆と怒り、第10回(1947年8月3日)放送脚本から】

愚かなる大人たちが…無知な馬鹿者たちが…暴力をかさに着て威張り散らし…我々の仲間の善良なる誰かが、その暴力によっていためつけられているのを見ても、誰も彼もが、それを助けやうともせず、とめやうともしないで見て見ぬふりをする惻巧者ばかりの此の世の中である。正義という者が影をひそめた此の世の中に於いては、子供たちが、その愚かな無知な憎むべき奴等を、英雄だと思つたり、尊敬したり真似したりするのは当然のことである。…大人はそのやうな子供たちの姿を見て、不良とののしり、悪童と云つて叱る。だが、はたして今の世の中の大人に、そのやうなことを言ふ資格があるのであろうか。

やがて日が暮れやうとする浅草寺境内。

修平は涙をうかべて浅草寺の雑踏を眺めていた⁵³

【浮浪児隆太の戦闘心、第24回(1947年9月21日)放送脚本から】

会体の知れない相手…顔の見えない暗闇…。隆太のもうすでにあらゆる希望を失って、なえてしまった心には、此の時フト…誰からもかへり見られず、雑草ノように踏みにじられて生きている浮浪児に、唯ひとつ点が与へた、生きてゆく為のたくましい戦闘心が湧き起って来た⁵⁴

【台詞の削除】

台詞を削除した箇所もある。以下は『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』では省いた第42回(1947年11月23日)放送脚本中の、修平と浮浪児・戦争孤児を顎使している山田親分との応酬である。

修平 あなたは一度や二度は、あの子供たち御飯をたべさせたでせう…しかし、あなたは別にあの子供たちをよういくしたわけぢやないんです…ただ…自分たちの悪事に利用

してるだけなんです。

親分 おい、お前、俺が誰だか知ってるのか

修平 私は子供たちに害をあたえられては困ると思ってあなたの言い分を聞いたのです。
あなたは悪党です⁵⁵。

2. 「しかし、未だ望みはあるのです」 —— 菊田一夫の希求したもの ——

菊田一夫は、『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』を、第42回放送(1947年11月23日)で終えたが、同書巻末には「鐘の鳴る丘 第三篇「吹雪の巻」を1948年11月に発売するとの広告が載っている。当初は、これで完結することとしていた第52回放送(1947年12月28日)までを、同様のスタイルで刊行する予定でいたのである。しかしながら、管見の限り刊行された形跡はない。

したがって放送台本の刊行は、山田親分から救出した浮浪児・戦争孤児、信州へたどり着いた修吉・桂一、修平に送る金を盗み修吉を崖から突き落とした昌男らが、「少年の家」のクリスマス・パーティに集う第52回放送のエピソードには、結果として到達しないまま終わったのである。

とはいえ、筆者は菊田一夫の巧みな作劇方法には瞠目させられる。

『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』は、都電に乗っている修平に気付いた修吉が、三日間新宿駅に立ちつくして修平を探すか、「新宿駅の群衆の、誰にも無視されたまま」、空腹のあまり昏倒し、新聞売りの老婆に助けられる場面で終わる。

老婆 その子修吉という名前かね。

桂一 ……お前なんかあつちへ行けよ。俺たちは誰にも助けて貰わなくてもいいんだよ

老婆 (叱つて) 馬鹿をいいなさい……

駅員 (笑つて) ……おい、そんなことをしていると、しらみがうつるぞ

老婆 しらみがうつるのと、子供が一人死ぬのと、どつちが大変なことかね。……私だって、駅の新聞売りの婆あだからね、しらみぐらいいるかもわかりませんよ

(中略)

桂一 ……修吉兄ちゃん、ここのまわりとりまいてる奴ら、みんな兄ちゃんのことを笑つたよ……やつけてやろうか

修吉 馬鹿……よせ……俺、悪いことしないんだ。どんなにおなかがへつても(悲しくなる)悪いことなんかしないんだ……

桂一 どうして?

老婆 さあおいで……あんたたち、お婆あの方に泊まつてもええのだよ。……来るかね……さ、おいで。……来るだろ

修吉 ……桂一、お婆さんのとこへ行こうよ

桂一 うん

老婆 ……二人ともええ子だな……。まるで、いなくなつたお婆あの子みたいに、ええ子

だな

「効果」「駅の外に雨が降りだしたらしい」

音楽 (……強く訴えて……T.F)⁵⁶

放送劇「鐘の鳴る丘」脚本の途中で『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』を終えざるを得ず、かつ続編へつなげるとすれば、この場面が最も劇的であった。

菊田一夫は、『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』の「まえがき」では次のように述べている。

浮浪児は昭和二十三年に入ってから、俄に性格を変えてきました。それは街の寄生虫たちの、人情、無知、悪意、教唆を交えた教育が、浮浪少年少女たちの身体にしみこんで、その恐るべき効果が、いよいよ姿を現してきたのだと言うべきであろうと思います。……世間の正常な生活をする人が、浮浪児に無関心で、街のダニたちが関心をもつ……と言うことは、どういう結果が招来されるのか。言わずして明らかでありましょう……

しかし、未だ望みはあるのです⁵⁷

菊田一夫は、浮浪児・戦争孤児を嘲笑し侮蔑する駅員と大勢の通行人に、浮浪児・戦争孤児の自制・老婆の親切を対置して、「しかし、未だ望みはあるのです」と述べていた「望み」を描出して、未完の放送脚本である『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』を「完結」して閉じた。

菊田一夫は、『鐘の鳴る丘 (第一篇 隆太の巻)』・『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』を、「読む為の戯曲」として刊行したのである⁵⁸。

③「鐘の鳴る丘 (ラジオ・ドラマ) 第一篇・隆太の巻より」(菊田一夫『菊田一夫戯曲選集』1、演劇出版社、1965 年)は、『鐘の鳴る丘 (第一篇 隆太の巻)』全 230 頁から前半の 157 頁分を割いて載せたものである⁵⁹。放送劇「鐘の鳴る丘」の「第一回から第十二回に至る極く最初の部分——加賀見修平が隆太を伴なって、上野駅から信州に出発する発端の部分」である。

登場人物の一覧と「本文中の略記号」(「放送脚本技術用語解説」)を載せていること以外は、『鐘の鳴る丘 (第一篇 隆太の巻)』と同一である。

IV 舞台劇「鐘の鳴る丘」の上演

1. 舞台劇「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」の上演

菊田一夫は、放送劇「鐘の鳴る丘」脚本をを舞台劇脚本に改稿して上演した。

1948 年 1 月 4 日の第 53 回放送劇「鐘の鳴る丘」(正月お休みの巻)において、能勢妙子が「お芝居にはならないのですか」と尋ね、菊田一夫は「お芝居はですね、この一月二十一日から丸の内のある劇場でやります」と答えている⁶⁰。菊田一夫は、1947 年のうちに舞台上演を構想していたことは疑いない。「鐘の鳴る丘」(正月お休みの巻)放送からほどない、1947 年 1 月 17 日付新聞には、「ラヂオで御馴染みの／菊田一夫作・演出／鐘の鳴る丘 四幕六場／廿一日より

上演御期待下さい／毎日正午より二回／二月二日まで／日劇小劇場」との広告が載った⁶¹。菊田一夫とNHKは、放送を通じて舞台劇版「鐘の鳴る丘」を宣伝したのである。

この「お芝居」が④「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」である。『青年演劇』（1948年5・6月号）に載った戯曲「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」によって、その概要を以下に掲げる。

- 〔1〕舞台は1946年の東京省線（現 JR 山手線）ガード下である。
- 〔2〕浮浪児・戦争孤児（隆太・留男・みどり・俊次・謙一）は、暴力団山田久平の子分俊春・芳松のもとで靴磨き・新聞売り・スリの手伝いをしている。
- 〔3〕感化院を脱走した修吉・桂一は靴磨きをしている。留男・俊次は修吉・桂一と靴磨きの縄張りを巡って争う。
- 〔4〕弟修吉を探すために上京した加賀見修平は、隆太に鞆を奪われ、追いかけて取り返した。修平と隆太は食堂へ行くが、店主は浮浪児を理由に入店を拒否し、怒った隆太は食堂の金庫を盗み逃走し、仲間と疑われた修平は逮捕される。修平の逮捕を知った隆太は、食堂へ金庫を返し、警察署前で修吉の釈放を待つ。
- 〔5〕修吉・桂一ら浮浪児・戦争孤児は収容所の狩込みにあい、逃げようとした修吉はトラックにはねられ、脚を負傷する。
- 〔6〕負傷した修吉をいたわる少年を、母親は「浮浪児とつきあうと悪い子供になります」と叱る。
- 〔7〕修吉は指名手配中の脱獄囚立花に助けられる。
- 〔8〕修平は「僕はこの由利枝さんにも助けて頂いて、…穂高岳の麓の丘に君達の少年の家を作るつもりなんだ、行こうじゃないか」と、隆太ら浮浪児・戦争孤児を信州へつれて行こうとする。
- 〔9〕警官に追われた立花は電車にはねられて死亡する。
- 〔10〕修平は隆太ら浮浪児・戦争孤児を山田親分から救い出そうとし、芳松ら子分から袋だたきにされ連れ去られるが、由利枝が警察に通報して保護される。
- 〔11〕隆太ら浮浪児・戦争孤児は山田親分から修平のもとへ逃げ、一緒に信州へ行くという。修平は修吉と新橋駅ガード下で再会する。修平は、修吉に隆太らを「お前の兄弟たちだ」と紹介する。

菊田一夫は、90回を超えている放送劇の舞台劇化は無謀に近いが、「あちらこちらで、劇化して貰いたいとの御希望があつたので、その無理を押し切つて、第一回から第六十二回までの筋を、適当に摘出して所要時間二時間強の、上演脚本にまとめてみた」と述べている⁶²。「適当に摘出」したとしながら、「幕があく前のことば」では次のように述べている。

この劇は、NHK から全国に放送されている連続放送劇「鐘の鳴る丘」の昭和二十二年度分を脚色したものであります。何分にも原作が非常に長篇なので、そのまま劇化すること

ができず、短くまとめて一つの物語とするために、原作とはなれて、自由に脚色した部分が相当にあります⁶³

「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」は、加賀見修吉が弟修平と再開する場面で終わっている。兄弟の再会は、放送劇「鐘の鳴る丘」1947年12月28日(第52回)において、兄弟が再会を果たし、「少年の家」でクリスマス会が執り行われる場面とある程度は照応している。「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」の初演は1948年1月21日であり、「昭和二十二年度分を脚色」することはできない。菊田一夫が「昭和二十二年度分」と記したのは、1947年12月28日(第52回)放送までのことである。

また、菊田一夫は「放送劇脚本を、舞台劇用に脚色するにあたって」、上演場所は舞台機構のない学校の講堂、工場の広場などだろうと考えて、「一場面に極減した」結果、放送劇と舞台劇では違いが生じたと、次のように述べている

……放送の方で言えば、当然信州の、緑の丘で演じられなくてはならない部分、岩手県水沢町で演ぜられなくてはならない部分、あるいは全じ東京でも、芝浦海岸で行われた会話などが、すべて、形と環境を変えて、「新橋駅付近のガード下」で、済ませてしまっています。その為に、劇中いたる所に無理が顔を覗かせ、必然性が姿をひそめ勝ちとなつています⁶⁴。

菊田一夫が述べたとおり、戯曲は放送劇と以下の点で異なっている

- 〔1〕修平と伯父との軋轢、伯父の子らの窃盗、しのの助成、町長の寄付、隆太と山案内人万治の子龍太との邂逅、隆太らによる鐘の発見、食糧提供を拒む村人、「少年の家」の建設、雪山での修吉の遭難と救助、クリスマス会など、「信州」で展開する放送劇のエピソードは、戯曲では一切登場しない。修平・由利枝・隆太が台詞で「信州」に触れるだけである。
- 〔2〕放送劇では、修吉は岩手県水沢で列車から跳びおり、怪我を負って立花に助けられ、警察に追われた立花は、トラックで逃走中に崖下に転落するが、戯曲では省線電車にはねられて死ぬ。
- 〔3〕放送劇には配していない「闇の女」(勝江)、花屋の親方に花売りの他に「いろんなこと」を強いられている杏子(家出娘)と彼女を探す母親(声のみ)、つち(屋台のおでん屋)、二人のダンサー、警察官などが登場する。

勝江は、杏子・俊次の焚き火を持ち去るつちを「子供だって、苦労して拾って来た焚きつけなんだよ。大人のくせになんだい、子供のものをごまかして恥ずかしくないのかい。」と非難する。それに対してつちはこう応ずる。

どうせ、浮浪児がかつぱらつて来た焚きつけじゃないか、ズベ公や浮浪児が一人前の口きくんじやないよ、こつちはれつきとした堅気だよ⁶⁵。

「君浮浪児かい？家がないの？」と負傷した修吉をいたわる子を、「浮浪児なんかとつきあとうと悪い子供になりますからおよしなさい」と母親はとがめる⁶⁶。暴力団が浮浪児を手下として使喚しているのを疑問視する修平に、「まあ、しかし、街をはつつきあるいてるより仕末がいいよ」⁶⁷と、警部補は暴力団に微温的であった。

菊田一夫は、浮浪児・戦争孤児を思いやる「闇の女」と子どもに対して「堅気」のおでん屋と母親を、浮浪児・戦争孤児を暴力団から引き離そうとする修平に、暴力団に微温的な警察官を対置した。

戯曲「鐘の鳴る丘」で新たに登場した人物と場面は、いずれも「短くまとめて一つの物語とするために、原作とはなれて、自由に脚色した部分」の重要な構成要素であった。菊田一夫は、放送劇を「短くまとめて一つの物語とする」ことを機に、別の「鐘の鳴る丘」を意図したのである。

菊田一夫は、「連続放送劇「鐘の鳴る丘」を聴いている人々の為の、舞台劇「鐘の鳴る丘」なのだ」と、聴取者への依存を隠していない。その一方で、「この脚本が中途半端のそしりを受けることは、覚悟の前」と記すしかなかった⁶⁸。放送劇「鐘の鳴る丘」は、1947年12月28日（第52回）において、東京からの浮浪児・戦争孤児が暮らす「少年の家」のクリスマス会で「完結」していた。しかし、戯曲は、隆太らが信州で暮らすために山田親分から逃れ、相前後して修平・修吉兄弟がガード下で再会して幕が下り、修平と浮浪児・戦争孤児とのかかわりを一気に薄めてしまった。

新聞広告のとおり、「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」は、つくし座が日劇小劇場で、1948年1月21日～2月2日、2月16日～2月29日に上演した⁶⁹。上演中の1948年2月15日に、『読売新聞』は、「NHK でおなじみの「鐘の鳴る丘」は各県教育課の要望で三月十日から一ヶ月半小学生を相手に各地を巡演する」と報じている⁷⁰。

1948年7月11日付『読売新聞』朝刊広告には、多摩川園劇場において、7月16日まで東宝劇団・つくし座が、平日は正午から2回、日曜日は午前10時から3回上演するとあった⁷¹。

「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」巡演の全容は不詳である。

管見の限り、「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」の上演を正面から論じたのは、尾崎宏次「浮浪児の芝居 “鐘の鳴る丘” をみて」⁷²以外には見あたらない。

尾崎宏次は、作者の意図は「浮浪児たちがいかに理想の生活」をはじめるかという点にあると述べている。そのうえで、「新橋の省線ガード下でたむろしている少年たちが、復員者加賀見修平という人物にすくいあげられるところまで」を描いていると評価した。また、「夜の女とか浮浪児の生活は、それ自体なんらの装飾をほどこさなくても、劇的な刺戟をもっていることを軽視するわけにはいかない」と、「闇の女」勝子を配した意味に着眼した。

上演時間は2時間20分で、「十歳前後の子供が、親につれられてきているのが大部分観客層」であったとの観察は貴重である。

一方で、尾崎宏次は、ラストシーンの兄弟の再会は「戯曲の主軸」ではない、主軸は「浮浪

児の生活である筈だ」と批判した。浮浪児・戦争孤児は「何を求めているか告白していない」、「路傍にはそうしたありのままの姿がころがっているけれども、戯曲のなかに再生される場合には、ただそれだけではすまされないものがある筈だ」と、「劇的な刺戟」を有しているという「浮浪児の生活」の描出を求めた。菊田一夫は「どんな社会を理想としているのだろうか？」との問いを発してもいる。

小山源喜(修平役)はじめ「放送劇団の人々も舞台の発声法でないし、役を肉体をもつて表現することに全くなれていないので、ことごとく幼稚である」と、指摘してやまない。

ラストシーンの兄弟の再会は、「戯曲の主軸」ではない、主軸は「浮浪児の生活である筈だ」との指摘は、菊田一夫には堪えたであろう。

浮浪児・戦争孤児が「何を求めているか告白していない」と述べているが、新橋の隆太は「浮浪児なんか好きじゃねえよ」、「浮浪児なんか! (泣く) …俺なんか死にやいゝんだ…死んでやらあ」と叫び、みどりはスリを働く俊春は「えらいね」と言い、一方でおもちゃ屋になりたいと話しており、尾崎宏次の指摘はやや的外れである。

とはいえ、放送劇「鐘の鳴る丘」を「ほとんどきいていなかった」という尾崎宏次は、放送劇からは自由であり、「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」を舞台劇そのものとして批評することができた。

舞台上演を観ていない劇評もまかり通っている。

「(座談会) 現代戯曲の諸問題」で、高橋昌之助が、「鐘の鳴る丘」なんか、見てはゐませんけれども、あの浮浪児にしても、ニヒリストみたいな浮浪児のタイプが出来てゐる」と述べ、戸板康二が「実際の浮浪児のタイプを演劇の方で規定してしまう場合もあるでせうね」と応じている。高岡宣之は、三好十郎・久保栄・眞船豊は「西欧の文学をよく読んでゐる……教養をなんかの形で身につけてゐる」が、「菊田氏は割合にそういう文学的重荷を持つてゐない。だから身軽に駆け出せる」と言いつのつた。「東京哀史」(日劇小劇場、1947年1月12日～25日、1947年3月1日～10日)、「墮胎医」(日劇小劇場、1947年11月10日～11月3日、1947年12月5日～28日、いずれも菊田一夫作、薔薇座)⁷³を観ていないという三好十郎は、菊田一夫には「ヨーロッパ的教養がはいつてゐない」、「近代がない。モダニズムがない」と繰り返した⁷⁴。

しかし、「東京哀史」の戯曲を載せた『日本演劇』(1947年4月)には、「東京哀史」は、モルナールのいい影響を受けたものであるとバラ座公演の時、小冊子に書いていた⁷⁵とある。筆者は未見である。

「見て」いなくとも菊田一夫批判が許されるなら、筆者のように戯曲を読んだだけの批評もあり得るだろう。

先述のように「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」には、丘に建つ「少年の家」は台詞の中にしか登場しない。敢えて記せば、「鐘の鳴る丘」という戯曲のタイトルはその内容にふさわしいとはいえない。

では、「短くまとめて一つの物語とする」という菊田一夫の企図は達成できたであろうか。修平と秦野由利枝は、「僕とはついこの間知り合いになつたばかりの人なんだ。ただくになが同じだというだけでね」という間柄である。修平は「僕はこの由利枝さんにも助けて頂いて……少年の家を作るつもりなんだ」⁷⁶と隆太らを説く。しかし、由利枝の登場は唐突であるだけでなく、修平を支援する契機は説明がない。

この難点を除けば、東京へ弟を探しに来た修平が、山田親分から隆太ら浮浪児・戦争孤児を救い出し、浮浪児となっていた弟と再会することで、「一つの物語」として完結はしている。「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」には、放送劇『鐘の鳴る丘』で山中で唐突に見出される「鐘」がなく、放送劇にはない「闇の女」、山田親分の闇取引、山田親分に微温的な警察官を配することで、浮浪児・戦争孤児を取り巻いている 1946 年の状況を描出している。浮浪児・戦争孤児とかかわる「闇の女」を配した分だけ、「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」は、放送劇『鐘の鳴る丘』よりは、「東京哀史」や、娼婦が浮浪児・戦争孤児を養育する「風の口笛」(1961 年)に近似している。

「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」の執筆とその上演は、放送劇『鐘の鳴る丘』に依存しながら、放送劇を聴いていなかった人びとと就中子どもを対象とした「鐘の鳴る丘」でもあった。菊田一夫が「原作とはなれて、自由に脚色した部分」と述べた意味は大きい。観劇者のほとんどは、放送を記憶し主題歌を歌うことができたろう。しかし、すべての観劇者にとって、「原作」は消え去ったラジオの音であり、「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」は、舞台劇を観た人びとには「放送とは全然別の舞台劇」(菊田一夫)であった。

2. 菊田一夫とモルナール

「(座談会)現代戯曲の諸問題」において、三好十郎たちが菊田一夫を嘲笑したからには、菊田一夫のモルナールへのこだわりを述べておかなければならない。

以下は、舞台劇『東京哀詩』上演中の 1947 年 1 月 17 日付『東京新聞』に載った劇評である。

……職人仕事に追われている菊田一夫の『東京哀詩』はじっくりすいこうのみえる力作である。

やみ市の騒音を背景にしたガード下を世界に、エクリヤを知っているのや最中をはじめて食べる戦災浮浪児五人をめぐって、やみの女と復員のテキ屋の次第に昇華されてゆく恋愛をからませ菊田好みの感傷と愛情の綾取りがモルナール風の美しい感触で描かれ、哀しい余韻を残していつもの腰折れもない。作者自身も十分肯定しているお伽噺になっている甘さに、もっと厳しい批判を欲しがむ向きもあろうが、詩人としての愛情がそれを救っている。いくらでも新派になるこの作品を佐々木孝丸の演出で太い線で貫き、千秋実、佐々木踏絵も柄にない役も放胆な演技でまとめられている。よき新人河野国夫の装置もタッパの低さを逆に利用した佳作である。天国の場で子供たちに与える菓子の小道具の貧弱さに日本の演劇の現実が痛いほど感じられた。(安)⁷⁷

(安)は安藤鶴夫である。菊田一夫の弱点にも踏み込み、「モルナル風」とも指摘し、舞台装置も褒めた、過不足のない批評である。

「(座談会)現代戯曲の諸問題」における「文学的重荷を持つてゐない」という、「菊田一夫を軽蔑したような物の云い方」を批判し、菊田一夫はフェレンツ・モルナルに私淑しており、「汚れた顔の子供たち」に対する愛情と、その子供たちをよごれたままにしておくものに対するはげしい憤りは脈打っている」と菊田一夫を擁護したのは、佐々木孝丸であった⁷⁸。

1951年には、菊田一夫『ラジオ・ドラマ選集』に収録した放送劇「東京哀史」を解説して、中川忠彦は次のように述べた。

菊田さんは昔からモルナルが大好きである。あの中欧の作者のもつ詩とペエソス、菊田さんにはそれに共通したものがたくさんにある。これは菊田さんの『リリオム』である。鷹取はリリオムであろう。モルナルと異うところは、菊田さんは子役達を、それもしいたげられた子ども達を深く愛しているということである⁷⁹

しかしながら、菊田一夫は1952年に、「東京哀史」とモルナルについて、次のように述べている。

(5人の戦災浮浪児が雲上で両親に会う)「天国の場」は……はっきり言えば、モルナルの「白い雲」の模倣である……

初演に際しては、此の場は不必要であるというのが一致した劇評であったが、作者は此の「天国の場」を子供達に与えてやりたい為に此の作品を書いたのである⁸⁰

リリオムが天上から妻と子どもに会いに降りてくる『リリオム』を、引き合いに出したのは、中川忠彦の見当違いである。劇作家が自作の戯曲集に付された解説を読まないはずはない。菊田一夫は、中川忠彦の解説を正そうとしてこの文章を書いた。

菊田一夫が「模倣」したというのは、子どもたちが天上の戦死した父親に会いに行く「白い雲」の第3・4場(「白い雲」、『フェレンツ・モルナル戯曲集 恋はすれども』鈴木善太郎訳、第一書房、1932年、24～62頁)のことである。

菊田一夫が「モルナルの「白い雲」の模倣である」と述べているにもかかわらず、尾崎宏次は菊田一夫を追悼して次のように述べるのである。

……ガード下にたむろする戦災浮浪児と街の女を設定して、こころやさしいセリフでこの作品(「東京哀史」)をいち早く書いた動機は、菊田一夫がフランツ・モルナルの『リリオム』を念頭に描いたからにはほかならないと思う。……敗戦から二年目にしてモルナルの芝居が還ってきたのだな、と、いまの私には読める⁸¹

尾崎宏次は、「婦人の時間 この人この道 菊田一夫」(1962年12月27日、NHK教育テレビ)で、菊田一夫に放送劇「鐘の鳴る丘」の「前提」を質問していたあの尾崎宏次である。

菊田一夫が、ハンガリー出身の屈指の劇作家モルナールに傾倒していたことは、「男の流行」(『フエレンツ・モルナール戯曲集 男の流行』鈴木善太郎訳、第一書房、1930 年)を翻案した「愛情について モルナールの作品より」⁸²を執筆していることから明らかである。この戯曲は、三越劇場の1947年9月興業で、伊志井寛を主役に据えた新生新派が上演した⁸³。

「男の流行」の演出は、「(座談会)現代戯曲の諸問題」の席で、菊田一夫には西洋文学の素養がないと断じた高岡宣之が担当していたことも記しておく必要がある⁸⁴。

菊田一夫を貶した者は論外としても、褒めた者も、菊田一夫のモルナールへの傾倒を彼に寄り添って理解しようとしていないのである。

3. 舞台劇「鐘の鳴る丘 信州篇」の上演

1948年7月3日～8月4日、創作座が⑤「鐘の鳴る丘 信州篇」(3幕10場)を有楽座で、毎日2回(午前11時～、午後2時半～)上演した⁸⁵。

『有楽座』No.32(1948年7月3日)は、「劇団創作座公演 鐘の鳴る丘 信州篇」の「スタッフ」、「場割」、「御ことわり」、「梗概」、「出演者連名表」、「推薦の言葉」(法務省少年矯正局長齋藤三郎)、「子供達に「緑の丘」を」(日本社会党文化部長江木武彦)、「鐘の鳴る丘 信州篇」上演に際して」(菊田一夫)、「今は亡し、母と姉」(多摩少年院M・S(少年))、「汗」(瀬戸少年院T・A(少年))、「私の日記」(菊田一夫)からなっている。

「御ことわり」の全文を以下に掲げる。執筆者名は記載がない。

日劇小劇場で今年の一月に上演した「鐘の鳴る丘」(東京篇)は、放送の方で言へば、昨年度の第五回目から第二十回目までの部分と、第三十二回(第三十)三回と、第四十回目部分とをつなぎ合はせて、まとめあげたものなので、あれだけを見ても、放送劇の昨年の分の、あらましの筋がわかったわけです。しかし、せまい舞台で、たつた一場面きりの舞台装置で、筋をはこんだ為に、無理が出来て、岩手県を背景として描いた、立花という脱獄囚人の事件を、東京ですませたりいたしております。また、放送劇の方では、修平と修吉は、あの前篇のように東京で再会するのではなく、信州へ帰ってから、吹雪の崖の上で再会するのです。その点だけを見ても、今回の信州篇は、出来るだけ、放送劇に忠実に、のびのびと脚色したことがおわかりと思います。

今回の「信州篇」は、続篇であり、同時に放送(昨年度の)の、後半三分の二の殆んど筋を、再生しているわけで、舞台の東京篇には現はれなかつた部分の全部を描いているわけです。

この劇の第三幕第九場第十場が、昨年末放送の第五十二回にあたり、これを終えてから、クロちゃん、ガンちゃんなどの、登場となります。

前篇を見て、修吉と修平は、東京で会つた筈なのに、どうしてまた別れているのだらうと、お思いになる方があるといけないので、一寸おことわりいたします⁸⁶。

「N・H・K連続放送劇より 鐘の鳴る丘」は、ここでは「前篇」あるいは「鐘の鳴る丘」(東京篇)に変じている。「鐘の鳴る丘」(東京篇)は、「五回目から第二十回目までの部分と、第三十二回(第三十)三回と、第四十回目部分とをつなぎ合はせて、まとめあげたもの」とあるが、先述したように、戯曲「鐘の鳴る丘」は、放送劇「鐘の鳴る丘」の第3回(1947年7月12日)～第52回(1947年12月28日)までの抜粋である。

「鐘の鳴る丘 信州篇」は、菊田一夫が作・演出を、古関裕而が作曲・編曲を担当した。

尾崎宏次から放送劇団員は舞台では「ことごとく幼稚」と批判されたことを踏まえて、加賀見勘蔵(修平の伯父)に井上正夫、秦野豊(町長)に渡邊篤、加賀見修平に石黒達也などの俳優を配した。出演者は、俳優・子役総勢60人、歌手5人におよんだ。

菊田一夫は「「鐘の鳴る丘」信州篇上演に際して」において、「国を再建する」には「子供たちの成長に期してまつより仕方がない」として、次のように述べている。

それと同時に、全国いたる所の、巷の中の浮浪児たちが、現在の如く街のならず者の手におさめられている状態は、一日も早く精算されなくてはなりません。

人々の何故『世間一般がわが家の子どものみはなめるが如くに溺愛するくせに、浮浪児達たちに対しては冷淡であるが故に』便宜的に結ばれた、この両者の手をもぎ離してやらないのでしょうか。あの子供たちが、あのままの姿で成長して行つた、未来の社会を、人々は想像したことがあるのでしょうか。これは、どうしても、立派な結末をつけなくてはならない問題です。私は子供たちに正しく育つて貰いたい。たゞそれだけのことでこの仕事を続けています⁸⁷

戯曲は未詳だが、「梗概」(『有楽座』No.34、表紙裏～2頁)によれば、物語は修平が隆太を伴って信州に帰郷する場面で始まり、「少年の家」のクリスマスを勘蔵が戸外から見つめている場面で終わる。これは、放送劇「鐘の鳴る丘」第13回(1947年8月16日)～第52回(1947年12月28日)に相当する。「鐘の鳴る丘 信州篇」は、「前篇」と呼んだ戯曲「鐘の鳴る丘」と時制が完全に重なっているのである。

以下は知り得た唯一の演劇評である。

ラジオ放送は一年を迎え、いろ／＼と問題をおこしているが、この舞台劇はお上品で、健康で楽しい。歌と芝居の融合したものから今日の大衆演劇は生まれるのだが、この不自由な条件下でともかくここまでの芝居が上演されたのはいいことである。菊田一夫の技量がよい意味で融合されていることも見逃せない。隆太、俊次以下創作座少年群の好演。石橋達也、高橋豊子、井上正夫を迎えたことも成功している。大人の見るまじめな芝居⁸⁸。

「お上品」とは見逃せない指摘である。確かに、芳松ら3人の与太者を配しているが、山田親分は登場しない。「梗概」の第2幕第3場では「可哀想な修吉を、与太者の芳松たちはいぢめるのです」⁸⁹とあり、放送劇「鐘の鳴る丘」では山田親分配下の組員が修吉を打ちのめす場面な

どは、描かれていないかの如くである。

「鐘の鳴る丘 信州篇」においては、菊田一夫が希求した浮浪児・戦争孤児を使喚する「街のならず者」との対決を、「前篇」と比較するまでもなく、自ら点描のうちに置いた。当然のことながら、放送劇「鐘の鳴る丘」と比較すれば、この対決をはるか遠景におしやる結果になってしまった。

「鐘の鳴る丘 信州篇」をそれとして観れば、修平・修吉兄弟の邂逅、秦野豊・由利枝・しのの支援、「少年の家」の建設、修平と伯父一家との確執と和解は、『朝日新聞』が「お上品」「大人の見るまじめな芝居」と評するほどの上演となったのであろう。戯曲が未詳であるからには、これ以上踏み込むことはできない。

4. 「鐘の鳴る丘」(内村直也・三島由紀夫・宮津博編『日本童話劇』下巻)

⑥「鐘の鳴る丘」(内村直也・三島由紀夫・宮津博編『日本童話劇』下巻)は、タイトルが異なっているが、「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」と台詞もト書きも同一である。口絵には『青年演劇』版と同じ、日劇小劇場で上演した際の「「鐘の鳴る丘」第四場」の写真を載せている。「幕があく前のことば」は省いてある。

「執筆者紹介」では、戯曲「鐘の鳴る丘」について以下のように説明がある。

高学年向。三時間。約四〇人。終戦後その主題歌とともに、全国の少年少女を湧き立たした。有名なラジオ・ドラマの、作者自身の劇化したもの。混乱な世相の中で、たくましく正しく生き抜こうとする浮浪児群をえがいたもの⁹⁰。

浮浪児・戦争孤児救済の立役者である加賀見修平は、この「あらすじ」には登場しない。小学生が演ずるという条件に規定されて、「浮浪児群」に重点をおいた説明になっている。

いずれの搭載戯曲にも「時代性と東京下町の情緒を生かしてほしい」(宮津博「たけくらべの記」)、「鬼の扮装は仮面をかぶるよう」(くぼたひろし「こぶ」)などと、演出留意点を加えてあったが、「鐘の鳴る丘」にはそれがなかった。他の23編の収録戯曲の上演時間は13～45分であったのに対して、「鐘の鳴る丘」の3時間は際だって長い。

上演記録は未詳である。

VI 映画「鐘の鳴る丘」

1. 映画「鐘の鳴る丘」三部作

菊田一夫が放送劇「鐘の鳴る丘」の映画化にどのように関与したのかは不詳であるが、放送劇の視覚化という視点からは、重要なヴァリエーションではある。

松竹株式会社は、放送劇「鐘の鳴る丘」が好評を得ているのに当てこんで、下記のように「鐘の鳴る丘」の映画を作成した。3作とも監督は佐々木啓祐、脚色は斉藤良輔が担当した⁹¹。

⑫『鐘の鳴る丘 第一篇 隆太の巻』(松竹大船、1948年、1948年11月23日国際劇場封

切、11月29日一般封切)

⑬『鐘の鳴る丘 第二篇 修吉の巻』(松竹大船、1949年、1949年1月25日国際劇場封切、1月31日一般封切)

⑭『鐘の鳴る丘 第三篇 クロの巻』(松竹大船、1949年、1949年11月17日国際劇場封切、11月23日一般封切)。

『松竹七十年史』は、『鐘の鳴る丘 第一篇』について「ラジオの連続ドラマで評判の「鐘の鳴る丘」が佐田啓二、高杉妙子出演で封切られ、1949年2月には『鐘の鳴る丘 第二篇』が「全国的にヒットした」と述べている⁹²。

映画「鐘の鳴る丘」のヒット振りは、三上政義(北海道浦河町「大黒座」代表取締役)の次のような証言によっても確認できる。

これが大ヒット、お客が入って入って。それはもう、正面の木戸から入るよりも非常口から入る客の方が多いのです。大勢に手伝ってもらったのですが、入場券を売っている間がないので、その場で現金もぎ取りですよ。その現金を大きな御用籠に入れて裏の住宅に運び、ドサッと空けて急いで戻って来るのですが、またすぐにいっぱいになってしまう。家の茶の間は十円札の山になりましたね。映画が終わったあと、そのお札をみんなで一枚一枚しわを延ばしながら、大喜びで数えたものです⁹³

1949年1月7日付『新愛媛新聞』は、「「鐘の鳴る丘」／小学生に鑑賞」と見出しを掲げて、愛媛県新居浜・今治両市社会課が、『鐘の鳴る丘 第一篇』を市内小学生に鑑賞させるために、映画館の興業時間を早める措置をとったと報じた。

新居浜市社会課では一月十日から十六日まで市内敷島館で上映される「鐘の鳴る丘」を市内各小学生に朝八時から十時まで早朝興業して鑑賞させる。

今治でも、社会課では、七日から九日まで三日間午前十時から同市共楽館で上映中の「鐘の鳴る丘」を全市児童に鑑賞させることとなつた。入場料は十円⁹⁴。

新居浜・今治両市の事例を一般化するだけの資料は見当たらない⁹⁵。

『鐘の鳴る丘 第一篇』、『鐘の鳴る丘 第二篇』、『鐘の鳴る丘 第三篇』は、それぞれ放送劇「鐘の鳴る丘」の第1回～第35回、第36回～第52回、第53回～第174回に相応し、かついくつかのエピソードをそぎ落として「一貫した物語」に仕立ててある。

映画化に際して菊田一夫が著した「原作者が、この映画に対して望むこと」から、摘記しておく多少の意味はあるだろう。

子供たちが、その中にのびのびと手足をのばして、快く、踊ったり、あくびをしたり、笑ったり背のびをしたりするための…子供の心をあたためる蒲団のような毛布のような映画……

主人公の加賀見修平は、今の世には珍しい立派な人物です。この点から言えば、この放

送劇は、必ずしも、リアルな作品ではありません。社会悪をある程度までは、写実に追求して描いているくせに、主人公だけは、夢の中の人間のように美しすぎるのです。

しかし、これは原作者の夢なのです……映画の中に出てくる社会は、あくまでも写実に、そして、主人公はあくまでも、夢のごとく立派に⁹⁶

系列映画館・映画関係者・マスコミ等へ向けて、解説・制作意図・スタッフ・キャスト・宣伝文案・梗概等を載せたプレスシート『鐘の鳴る丘 松竹映画 NEWS』には、菊田一夫の「私の希望」も載っている。

……良き映画の出来ることを祈つてやみません。この連続放送劇に対する世の人の浮浪児問題の賛否両論は別として、この映画によつて、私の愛情の総てが分ることゝ思ひます。兎も角も、あの巷に巣喰う浮浪児達に、一日も早く、吾々は暖かい手をさしのべてあげなくてはなりません⁹⁷

『鐘の鳴る丘 第一篇』は、修平が省線新橋駅改札口から出てくる場面で始まり、岩手県水沢付近で列車から飛び降りて怪我をし、東京で靴磨きをしている修吉が、都電に乗っている修平に気づく場面で終わる。『鐘の鳴る丘 第二篇』は、修平が都電でスリの手下をしている留男をかばう場面ではじまり、「少年の家」のクリスマス・パーティの場面で終わる。ここまでは、放送劇「鐘の鳴る丘」の第52回（1942年12月28日）までとほぼ同じストーリーが展開する。

『鐘の鳴る丘 第三篇』は、大阪から来たトキ子らとレビュー団のクロと一緒に「少年の家」に到着する場面ではじまり、「少年の家」を出た隆太を追って修平・クロが青森へ向かう場面で終わる。第三篇にいたって、1948年1月以降の放送劇「鐘の鳴る丘」とは相当に異なってしまった。

放送劇「鐘の鳴る丘」と『鐘の鳴る丘 第三篇』との相違点をいくつかあげよう。

長野の暴力団が山田組の依頼を受けて、「少年の家」の支援者である町長を脅迫し、資金を得るために開催した音楽会を妨害する理由を示していない。放送劇「鐘の鳴る丘」では、修平が山田親分から浮浪児・戦争孤児を引き取ることについては、金銭で解決済みである。山田親分による執拗な「少年の家」妨害は、修平が戦友である新聞記者に山田組の悪事（殺人）を伝え、記者がそれを暴露した結果、山田親分が下獄したことに対する逆恨みである。

「少年の家」を出て東京で母親と暮らしている隆太が、山田親分が子分に命じた殺人の罪をなすりつけられ、「少年の家」の子どもたちが冤罪をはらすという放送劇のエピソードは、映画には登場しない。

映画では、旅回りのレビュー団で団長の妻として暮らしている隆太の母は、一片の愛情も示そうとしないので、クロを使って隆太を「少年の家」から連れ出す理由は説明されない。修平が隆太の消息を知るのは、隆太が青森で投函した葉書によってである。放送劇では所在がわかった母親を訪ねるため、クロは単独で北海道へ行くエピソードがある（第380回、1949年6月

1 日以降) ので、映画でも青森に行かせなければならないが、隆太を連れ戻すとなれば、修平を同行させるしかない。放送劇との違和感を薄め、かつ一貫したストーリー展開をはかろうとして、映画では放送劇とは別のエピソードを創らざるを得なかったのである。

2. 映画「鐘の鳴る丘」評

「一般封切映画については京浜地区代表的封切館の動員合計」である「観客動員数」(『映画年鑑』1950年版)によれば、1948年度に封切られた邦画162本(外国映画55本、総数227本)のうち、『鐘の鳴る丘 第一篇』の観客動員数は、128,005人(4館)であった。ちなみに、最高は『夜の女たち』(松竹、1948、監督溝口健二、脚本依田義賢)の392,420人(4館)であった。復員兵と浮浪児・戦争孤児が、働いて食糧を得ながら、徒歩で下関から「みかえりの塔」(大阪)に到着する過程を描いた『蜂の巣の子供たち』(蜂の巣映画、1948、清水宏脚本・監督)は144,455人(4館)、漁師に引き取られた浮浪児・戦争孤児が漁師として自活するまでを描いた『第二の人生』(東宝、1948、関川秀雄監督)は135,668人(4館)であった⁹⁸。

一方、ある映画評論家は、放送劇と舞台劇に対する「安価な運命劇」、「架空な夢物語」、「深刻な社会問題としての浮浪児問題に対する掘りさげの浅さ」との「世評」は「相応の根拠」があり、映画にも「世評」と同じ問題があるとして、以下のように批判した。

この映画化はあまりに機械的であり、画面化に都合よく整理された脚色であり演出であるという点にとどまる。そして題材のリアリティを突込むよりも平明なドラマにしてみせるといふ事の方に大方の努力が払われた様だ。……(浮浪児役は)いささか舞台臭いオーヴァ・アクトを演出が制御していないのは気になった。……問題は演技よりもむしろ脚本にありそうだ。感化院を脱走した弟をさがして同じ年ごろの浮浪児たちに更正の夢を結ばせようとする復員青年修平にしても、少年には自分と同じ道に墮すまいとする強盗にしても、修平の計画する浮浪児更正園に五万円を投じるといふ町長にしても、すべて肝心な積極面が空々しく響くのは、現実の社会に眼をすえる代りに、偶然や冒険の効果をねらいすぎたメロドラマの安直さによりかかっているせいであろう⁹⁹

1948年度キネマ旬報ベスト・テン(日本映画)には、『酔いどれ天使』(175点)、『手をつなぐ子等』(158点)、『夜の女たち』(157点)、『蜂の巣の子供たち』(124点)、『わが生涯の輝ける日』(94点)、『破戒』(92点)、『風の中の牝鶏』(76点)、『王将』(65点)、『生きている画像』(43点)、『第二の人生』(35点)が選ばれた¹⁰⁰。21人の委員は『鐘の鳴る丘 第一篇』を選考の対象にすらあげなかった。

『鐘の鳴る丘 第一篇』は興業的にはともかくとして、映画批評家からは相手にされなかったのである。なお、少なくとも『キネマ旬報』には、『鐘の鳴る丘 第二篇』・『鐘の鳴る丘 第三篇』の批評は見出せなかった。

菊田一夫の作品を原作とした42本のなかには、薔薇座の「墮胎医」を観た黒澤明が惚れ込ん

で制作した『静かなる決闘』（大映、1949 年、脚本黒澤明・谷口千吉、監督黒澤明、出演三船敏郎、原作は『墮胎医』）、大曾根辰夫が菊田一夫に書下ろしを依頼した『フランチェスカの鐘』（松竹京都、1949、脚本沢村勉、監督大曾根辰夫）のような作品もあることも記しておく¹⁰¹。

豊川松竹映画劇場（愛知県豊川市）館主柴田芳雄は、次のような回想を残している。

もう小十年になる。私のコヤ（劇場）で、「鐘の鳴る丘」を上映したことがある。そのとき、支配人の発案で、小中学校の生徒の作文を募集したものだ。

もちろん、宣伝として思いついたもので、応募した作文の中から、三十篇を選んで、ノートや、鉛筆の学用品を賞品に出し、その賞品授与式を、公会堂の会議室でやることになった。

……興業の宣伝から出発したことではあるが、催しとしては立派なことである。ことに、わたしは、三十篇の入選した作文をたんねんに読んだが、大半は戦争で父を失った学童であった。その学童達は、映画の「鐘の鳴る丘」をみて、感激し、強く生きぬくという決心をした、と書いているものが多かった¹⁰²

上映したのは三部作のどれか、また作文応募数も不明だが、放送劇と映画との異同、演技の巧拙は、児童生徒が映画に感動する妨げにはならないということだろう。この事例の類例は不詳だが、放送劇と映画との相乗効果さえ予想させる。

亀井實「映画『鐘の鳴る丘』を話題に 学童座談会 傍聴記」¹⁰³は、1949 年 2 月 18 日、「東京都文京区真砂小学校に区内の学童が参集、映画教室として鑑賞した松竹映画『鐘の鳴る丘』第二篇について座談会」の記録である。

昌夫・俊二役で出演した小学生も参加して、「雪の場面」、崖からの転落は「人形を上から落とす」などと撮影現場の状況を説明した。

以下に子どもらの発言を摘記する。（ ）は筆者の補足である。

- ①刃物を出すところを真似する者があり、いけないと思う。（自分に罪をかぶせた昌夫を刺そうと立花から貰ったナイフを取り出して、思いとどまる場面を指す）
- ②劇の進行上、仕方がない。
- ③山の龍太のお父さんが助けに来るところで終わってしまい、すぐクリスマスの晩になるのは変です。（崖の途中にいる修平・修吉・隆太を救助すべく龍太の父親が登場するが、3 人を引き上げる場面がないことを指している）
- ④一人一人助けられて崖から上つて来る所が見たかったのです。
- ⑤人形を使つたんだとすぐ解りました。（修吉が転落する場面を指している）
- ⑥雪の山も、本物でないことがすぐ解りました。
- ⑦昌夫君の婆やは、やめさせられたんでしょうか。（昌夫の言を信じた勘造に盗みを疑われたしのが、直後の場面では「少年の家」にいることを指している）

『鐘の鳴る丘 第一篇』では、街頭の浮浪児・戦争孤児は裸足だったが、蓬髪でも垢まみれでもなく、襤褸をまとってもいなかった。『鐘の鳴る丘 第二篇』では氷柱が薄い紙状で、風に揺らめいていて、筆者には観るに耐えない。台詞特に子どものそれは画一的で個性に乏しい。

愛知県名古屋市熱田中学校（現宮中学校）3年生の女生徒は、「鐘の鳴る丘」（何篇かは不詳）について、以下のように述べている。

私はこの映画から「善は悪より強い」ということをしみじみ、あじわった。

それとともに不良児の悪化は社会の大人の一つによつて、変つて行く事がわかつた。これは映画ではあるが、終戦後の日本の状態をそのまま、うつしとつて我々の生活に偉大なことを与へているのである。と云ふのは「正しき善の道は生活の最大の真実である」と私は感じる！¹⁰⁴

「映画の中に出てくる社会は、あくまでも写実に、そして、主人公はあくまでも、夢のごとく立派に」との菊田一夫の期待は、浮浪児・戦争孤児の描写と暴力団の脅迫・妨害の理由が説明されていないために「写実」には遠くおよばず、「夢のごとく立派」な主人公は充分過ぎるほどに立派であった。

松竹は第三篇で『鐘の鳴る丘 第四篇 カラスの巻』を予告し、梗概である『第四篇 鐘の鳴る丘（カラスの巻） 松竹作品』も作成したが、映画制作にはいたらなかった¹⁰⁵。

菊田一夫が完成した映画『鐘の鳴る丘』に言及した形跡はない。

むすび ——放送劇脚本刊行・舞台劇への改稿と上演、映画は「未完」——

本研究をまとめれば以下になるう。

「はじめに」では、NHK 連続放送劇「鐘の鳴る丘」は、放送劇・舞台劇・小説への改稿・映画化などのかかわりを踏まえて、菊田一夫が脚本を執筆した浮浪児・戦争孤児を描いた放送劇において、浮浪児・戦争孤児に自活を課したという点で、特別な位置にあることを確認した。

「Ⅰ 連続放送劇「鐘の鳴る丘」が一世を風靡したということ」では、放送劇「鐘の鳴る丘」と主題歌「とんがり帽子」の流布と、菊田一夫をもっぱら放送劇「鐘の鳴る丘」と結びつけて論じられることを、菊田一夫の言説を踏まえながら、相対化することを試みた。

「Ⅱ 連続放送劇「鐘の鳴る丘」の構成」では、放送脚本にもとづいて登場人物と物語の概要を整理し、放送劇「鐘の鳴る丘」が如何に断片的で乱暴に概括して語られているのかを確認した。

「Ⅲ 連続放送劇「鐘の鳴る丘」脚本の刊行」では、①『鐘の鳴る丘（第一篇 隆太の巻）』と②『鐘の鳴る丘（第二篇 信州の巻）』は、放送劇脚本の第1回～第42回までを部分的に改稿して刊行したものであり、続編は刊行されておらず、③「鐘の鳴る丘（ラジオ・ドラマ）第一篇・隆太の巻より」は第1回～第12回までの放送劇脚本の改稿であることを確認した。

「Ⅳ 舞台劇『鐘の鳴る丘』の上演」では、④「Ⅳ・Ⅲ・Ⅱ 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」舞台劇上演と脚本の刊行は、放送劇『鐘の鳴る丘』第1回～第52回を3分の1程度に短縮してなされたこと、放送劇では修平と浮浪児・戦争孤児の物語であるのに、舞台では修平が弟修吉と邂逅する場面で「完結」し、修平・修吉兄弟の物語となってしまったことを確認した。そのうえで、放送劇でも描いていた修平・修吉の邂逅を舞台劇で設定するとすれば、その場面で幕を下ろすのが効果的であり、上演時間と舞台の構造、なによりも「Ⅳ・Ⅲ・Ⅱ 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」とのタイトルのもとで、原作である放送劇に「自由に脚色」することがかなうはずはなかったことを論証した。

「菊田一夫とモルナール」は、筆者の菊田一夫への「肩入れ」である。

「Ⅴ 映画『鐘の鳴る丘』」では、⑫『鐘の鳴る丘 第一篇 隆太の巻』・⑬『鐘の鳴る丘 第二篇 修吉の巻』・⑭『鐘の鳴る丘 第三篇 クロの巻』は、それぞれ放送劇『鐘の鳴る丘』の第1回～第35回、第36回～第52回、第53回～第174回に相応し、かついくつかのエピソードをそぎ落として「一貫した物語」に脚色してあることを確認した。映画は、浮浪児・戦争孤児を視覚化したという点では、他のヴァージョンに比較すべくもない。しかし、映画の浮浪児・戦争孤児は、蓬髪でも垢まみれでもなく、子どもが汚い役を演ずるのは台詞においてのみであった。

本研究では、視覚化を証する図像を資料として提示できず、紙芝居・幻燈台本・絵本などの検討は手付かずであり、放送劇『鐘の鳴る丘』の視覚化は引き続き検討課題であるが、Ⅲ～Ⅴで一瞥したように、放送劇『鐘の鳴る丘』のヴァージョンが、音で聴く放送劇の一過性を打破し、視覚化に与ったことは確かであろう。

菊田一夫は、放送劇『鐘の鳴る丘』では1948年1月以降も唐突なストーリーをがむしゃらに積み重ね、第615回（1950年4月29日）で、北海道に「少年の村」を建設して、ようやく浮浪児・戦争孤児たちの自活の途にたどりついた。しかし、敢えて概括すれば、本研究では検討するにはいたらなかったヴァージョンを含む30点すべてが「未完」のうちに終わっている。放送劇『鐘の鳴る丘』の全容は、脚本すべてを読まない限りわからないのである。

放送劇『鐘の鳴る丘』終了後に著した、⑨菊田一夫『鐘の鳴る丘』上の「あとがき」では、「前期半年分（1947年7月5日：第1回～1947年12月28日：第52回）を小説化して……それ以後の放送の分は切り捨て、この単行本（上下巻）を以つて、思い出の『鐘の鳴る丘』決定本」としたいと思います¹⁰⁶と、⑩菊田一夫『鐘の鳴る丘』下の「あとがき」でも、「放送劇の最初の半分……つまり、浮浪児救出運動をテーマとしていた時期……を前後二篇にまとめて小説化したものであり、そのあとのぶんは一切小説化はやめて、これをもつて決定本とする」と述べている¹⁰⁷。

菊田一夫は、弟修吉を探しに上京した加賀見修平が隆太ら浮浪児・戦争孤児とともに暮らそ

うと、由利枝・しの・山案内人万次らの協力を得て「少年の家」を建て、クリスマスを祝う第52回(1947年12月28日)までを小説とし、「決定本」と宣言したのである。これは、菊田一夫が、放送劇「鐘の鳴る丘」は第52回までで「完結」し、かつ完成度が高いと考えていたことを示している。「主体的作家精神」(高山英明・斎藤次郎)の表出の期間、あるいは「哀しい余韻を残していつもの腰折れもない。作者自身も十分肯定しているお伽噺になっている」(安藤鶴夫)期間、あるいは舞台劇に改稿できた範囲と換言してもいい。

菊田一夫は、「街の寄生虫たちの、人情、無知、悪意、教唆を交えた教育が、浮浪少年少女たちの身体にしみこんで、その恐るべき効果が、いよいよ姿を現してきた」(『鐘の鳴る丘 (第二篇) 信州の巻』の「まえがき」と述べていたことは先に引いた。かつての浮浪児・戦争孤児たちは、「恐るべき効果」に抗し、「救済され、保護される」域を脱して、成人しつつ自活する方途を獲得せねばならなかった。1946年に加賀見修平と出遭った時には14歳であった隆太は、「少年の村」建設時には18歳前後にはなっていた。菊田一夫は、「主体的作家精神」をもって、1948年以降の放送劇「鐘の鳴る丘」を小説とはせず、自ら物語の範囲を「浮浪児救出運動」にとどめた。劇作家菊田一夫は、放送劇、その舞台劇脚本への改稿と上演の完成度、劇的クライマックスを求めて、自作バージョンはすべて第52回までで終えたのである。菊田一夫が悪戦苦闘して、浮浪児・戦争孤児の親を探し当て、裕福な養父母と縁組みし、暴力団と闘い、北海道に「少年の村」を開設して自活するにいたる長大な物語に照らせば、バージョンすべてが「未完」であった。放送劇「鐘の鳴る丘」のバージョンそれ自体の完成度を求めた結果、バージョンは放送劇「鐘の鳴る丘」の最終場面である「少年の村」を見ることはなかったのである。

菊田一夫が希求した、成人しつつある浮浪児・戦争孤児の自活＝「少年の村」建設は、放送劇「鐘の鳴る丘」を聴いた人々も、「少年の村」にいたる道程を物語ることとはなかったかの如くである。作者である菊田一夫も「少年の村」に触れたことはなかった。聴いて瞬時に音は消えてしまった。

それでも、菊田一夫は「東京哀詩」を執筆した理由を以下のように述べていた。

それでつまり、この子どもが大きくなったときどうなるんだろうかと思ったわけよね。

そのころの浮浪児の生態を見ているとき、つまりもう10何年かあるいは20年ぐらいのちは、日本中強盗だらけになるような気がしてきちゃったんだよね。

菊田一夫が念じた、成人しつつある浮浪児・戦争孤児の自活＝「少年の村」建設の物語は、荒唐無稽なエピソードとともにだが、菊田一夫が残した連続放送劇「鐘の鳴る丘」の脚本(放送台本)のなかに生きている。

付表 I 「菊田一夫作放送劇一覧」

No.	番組名	放送日	放送時間
1	沙漠のメリー・ゴオランド	1932 年 12 月 17 日	20 : 50～21 : 30
2	シラノ・ド・ベルジュラック	1933 年 6 月 28 日	20 : 00～21 : 00
3	ラヂオ・レビュー 春の細道 お蚕	1935 年 3 月 7 日	12 : 05～12 : 40
4	レビュー そよ風の唄	1935 年 8 月 16 日	12 : 05～12 : 40
5	ラヂオ・コメディ かなりや軒	1936 年 5 月 10 日	13 : 20～14 : 00
6	あやせ丸	1936 年 8 月 16 日	13 : 20～14 : 50 の間
7	ナンセンスコメディ 昇級酒合戦	1937 年 1 月 3 日	14 : 40～15 : 00
8	歌う水戸黄門	1937 年 3 月 21 日	20 : 45～21 : 30
9	立体漫才 カンカン帽物語	1937 年 6 月 3 日	20 : 25～20 : 35
10	トーチカ・ウイドウ	1938 年 5 月 5 日	20 : 50～、菊田関連バラエティ「武者人形博覧会」の一部、詳細は不詳
11	八軒長屋(上)(中)(下)	1938 年 6 月 27 日～29 日	20 : 00～21 : 30 の間
12	体操大臣	1939 年 2 月 22 日	21 : 00～21 : 40
13	秀鳳	1939 年 11 月 12 日	14 : 20～14 : 58
14	ロッパと兵隊	1941 年 12 月 18 日	20 : 00～21 : 10 の間、詳細は不詳
15	南の風(第一部)・(第二部)	1942 年 2 月 28 日	(第一部)20 : 00～21 : 00、(第二部)21 : 10～22 : 00
16	橿の走る河	1942 年 5 月 2 日	20 : 00～21 : 00
17	猿飛佐助	1942 年 6 月 28 日	20 : 00～21 : 00
18	お父ちゃん	1942 年 10 月 25 日	20 : 00～21 : 00
19	船長さん	1942 年 12 月 30 日	20 : 00～21 : 00
20	交換船	1942 年 1 月 31 日	20 : 00～21 : 00
21	花咲く港	1943 年 8 月 3 日	20 : 00～21 : 00
22	三国志	1944 年 3 月 2 日	19 : 40～21 : 00 の間、詳細は不詳
23	突撃の譜	1944 年 3 月 9 日	20 : 00～21 : 00
24	大東亜武俠団(第一夜)・(第二夜)	1944 年 4 月 3 日・5 月 7 日	(第一夜)19 : 20～21 : 00 の間、(第二夜)19 : 40～21 : 00 の間、いずれも詳細は不詳
25	波濤の花びら	1944 年 4 月 16 日	19 : 40～21 : 00 の間、詳細は不詳
26	霧幻軍艦(1)・(2)	1945 年 7 月 26・27 日	いずれも 19 : 00～21 : 00 の間、詳細は不詳
27	山から来た男(全 7 回)	1945 年 10 月 28 日～12 月 26 日	10 月 28 日・11 月 11 日 19 : 00～21 : 00、詳細は不詳、11 月 25 日 19 : 30～21 : 00、詳細は不詳、12 月 5・12・19・26 日 20 : 30～21 : 00
28	夜光る顔(全 4 回)	1946 年 2 月 6・13・20・27 日	20 : 30～21 : 00
29	時計塔の女	1946 年 3 月 17 日	13 : 15～14 : 00
30	駒鳥夫人(全 6 回)	1946 年 5 月 16 日～6 月 20 日	20 : 00～20 : 40
31	リラの花忘れじ(1)・(2)	1946 年 11 月 27 日・12 月 13 日	20 : 00～20 : 55
32	東京哀詩	1947 年 1 月 18 日	14 : 00～15 : 00
33	天使と海賊(1)(2)	1947 年 4 月 4・11 日	4 月 4 日 20 : 00～20 : 55、4 月 11 日 20 : 00～20 : 30
34	姿なき犯罪	1947 年 5 月 28 日	21 : 30～22 : 00
35	奇術師	1947 年 6 月 7 日	19 : 30～20 : 00
36	鐘の鳴る丘(全 790 回)	1947 年 7 月 5 日～1950 年 12 月 29 日	17 : 15・17 : 30・18 : 45・18 : 15～15 分間
37	地上の天使	1947 年 9 月 12 日	20 : 00～20 : 55

38	鳩の団九郎	1948年2月23日	21:15～22:00
39	狂える季節	1949年4月1日	20:30～21:30
40	鸚鵡の爪	1949年8月4日	22:00～22:30
41	黒百合夫人	1949年11月10日(第2放送)、 1950年5月26日再放送(第1 放送)	20:00～20:30
42	ゼエンランジャ城の幽霊	1950年1月6日	20:30～21:15
43	氷雨降る	1950年12月22日	20:00～20:45
44	さくらんぼ大将(全319回)	1951年1月4日～1952年3月 31日	17:30～17:45
45	島の嵐	1951年3月30日	20:00～20:45
46	秋芳洞(1)(2)	1951年6月1・8日	20:00～20:45
47	銀座裏午前二時	1951年8月1日、1952年5月2 日再放送	8月1日19:30～20:00、再放送は20: 00～20:45
48	浅草幻想曲	1951年11月30日	20:00～20:45
49	君の名は(全98回)	1952年4月10日～1954年4月 8日	20:30～21:00、最終回「君の名は完結 大会～花祭り特集」は20:15～21:00
50	海の風車	1952年8月8日	20:00～20:45
51	北京の鶯	1953年1月9日	21:15～22:00
52	宝塚ロマンス 花のいのちを(全25 回)	1953年4月18日～11月28日	15:30～16:00
53	長崎	1953年5月2日	21:15～22:00
54	鴎	1953年7月31日	21:15～22:00
55	流れ	1953年11月6日	21:15～22:00
56	愛情詩集(全4回)(ラジオ東京)	1954年3月5日～3月26日	11:15～11:30
57	山から来た男(全14回)(岡田教和 脚色)(ラジオ東京)	1954年4月2日～7月2日	21:10～21:35
58	由起子(全95回)	1954年4月8日～1956年3月 29日	20:30～21:00
59	湯の峯	1954年5月21日	21:15～22:00
60	青いひとで	1955年7月1日	21:15～22:00
61	忘却の花びら(全45回)	1956年4月5日～1957年3月 28日	20:30～21:00
62	午後8時13分(文化放送)	1956年6月12日～12月11日	21:00～21:30
63	都会という港(文化放送)	1957年9月4日～1958年5月 21日	20:30～21:00

《出典》①放送劇題名・放送日・放送時間帯はNHK放送博物館の御教示に負っている。

②「番組確定表」(NHK放送博物館所蔵)・調査は山本美穂子氏の御協力を得た。

③以下の文献を参照した。

日本放送協会編『NHK放送劇選集』第1巻、日本放送出版協会、1957年

日本放送協会編『NHK放送劇選集』第2巻、日本放送出版協会、1957年

日本放送協会編『NHK放送劇選集』第3巻、日本放送出版協会、1955年

日本演劇協会編『年刊ラジオ・ドラマ1954年版』宝文館、1954年

日本演劇協会編『年刊ラジオ・ドラマ』第3集、宝文館、1955年

日本演劇協会編『年刊ラジオ・ドラマ』第4集、宝文館、1956年

《注》 1、ラジオ局(ラジオ東京・文化放送)名を付していない番組は、すべてNHKが放送した。

2、「鐘の鳴る丘」(36番)の放送時間帯の詳細は、本文2～3頁を参照されたい。

付表Ⅱ「菊田一夫オリジナル放送劇を原作とする映画一覧」

No.	菊田一夫オリジナル放送劇 (放送日)	映画(制作会社、公開日)	配役など
1	夜光る顔(1946年2月6・13・20・27日)	夜光る顔(大映、1946年6月13日)	監督久松静児、脚本高岩肇、出演宇佐美淳、上代勇吉、伊沢一郎、折原啓子、浦辺条子など
2	駒鳥夫人(1946年5月16日～6月2日)	駒鳥夫人(松竹、1948年7月8日)	監督野村浩将、脚本長瀬喜伴、出演三戸光子、佐分利信、高杉妙子、宇佐見純也、飯田蝶子など
3	リラの花忘れじ(1946年11月27日・12月13日)	リラの花忘れじ(松竹、1947年10月28日)	監督原研一、脚色小田英夫、出演高峰三枝子、佐分利信、村田知英子、井上正夫、藤田進など
4	鐘の鳴る丘(1947年7月5日～1950年12月29日)	鐘の鳴る丘 第一篇(松竹、1948年11月23日)、同 第二篇(松竹、1949年1月25日)、同 第三篇(松竹、1949年11月17日)	監督佐々木啓祐、脚色斎藤良輔、出演佐田啓二、高杉妙子、本尾正幸、野坂頼明、笠智衆、徳大寺伸、井上正夫、飯田蝶子、殿山泰司など
5	さくらんぼ大将(1951年1月4日～1952年3月31日)	さくらんぼ大将(芸苑プロ、1952年9月18日)	監督田中研、脚色清島長利、出演村田禪、古河緑波、川崎弘子、戸田春子、田所千鶴子など
6	君の名は(1952年4月10日～1954年4月1日)	君の名は 第一部(松竹、1953年9月15日)、同 第二部(1953年12月1日)、同 第三部(1954年4月17日)	監督大庭秀雄、脚色柳井孝雄、出演岸恵子、佐田啓二、市川小太夫、望月優子、月丘夢路、淡島千景、野添ひとみ、笠智衆、淡路恵子など
7	鴟(1953年7月31日)	この恋! 5千万円(東宝、1954年1月3日)	監督佐伯幸三、脚色八住利雄、出演伴淳三郎、如月寛多、トニー谷、柳家金語楼、三益愛子など
8	由起子(1954年4月8日～1956年3月15日)	由起子(松竹、1955年8月3日)	監督今井正、脚色井出俊郎、出演津島恵子、木村功、宇野重吉、永井智雄、関千恵子、原保美など
9	忘却の花びら(1956年4月4日～1957年3月28日)	忘却の花びら(東宝、1957年1月3日)、同完結篇(東宝、1957年7月2日)	監督杉江敏男、脚色八住利雄、出演池部良、草笛光子、村瀬幸子、安西響子、司葉子、志村喬など
10	都会という港(文化放送、1957年9月4日～1957年3月28日)	都会という港(大映、1958年9月17日)	監督島耕二、脚色舟橋和郎、出演山本富士子、菅原健二、川崎敬三、品川隆二、杉田康など

《出典》 ①Movie Walker (<http://movie.walkerplus.com>、2013年8月14日に閲覧)

②東宝三十年史編纂委員会編『東宝三十年史』東宝、1963年

③松竹株式会社編・発行『松竹七十年史』1964年

④『日本映画作品全集』(『キネマ旬報』増刊No.615)、1973年11月

《注》 1、放送劇については、付表Ⅰも参照されたい。

2、1～9はNHKが放送した。

¹ 「沙漠のメリー・ゴオランド」については、1932年12月17日付『読売新聞』朝刊の「けふの番組」欄と放送劇概略紹介記事(「レヴユウの種は／二名映画のカクテル」)によった。1937年11月中旬にヤパン・モカルがオペラ館で上演したものの放送劇版である。

以下特に断らない限り、新聞記事は「ヨミダス歴史館」によった。映画「モロッコ」・「アトランティド」の日本公開時などは、双葉十三郎『西洋シネマ大学 ぼくの採点表』別巻(戦前篇)(トイーズプレス、1997年、39～40・644頁)、ジョルジュ・サドール『世界映画全史』国書刊行会、1992年、XI・238頁)を参照した。

しかしながら、菊田一夫は「僕の放送劇に処女作は「ドノゴオトンカ」である」と、放送時間を超過した失敗談、サトウハチローから贈られた懐中時計、サトウハチローの友人たちの推薦で執筆にいたった経緯を6頁余にわたって述べている(菊田一夫『流れる水のごとく〈芝居つくり四十年〉』オリオン出版、1967年、83～89頁)。

小幡欣治は「……昭和六年、ジュール・ロマンのシナリオ「ドノゴオトンカ」に脚色したのが最初である」(小幡欣治『評伝 菊田一夫』岩波書店、2008年、161頁)と述べている。しかし、1931年6月以降の各紙ラジオ番組欄に小幡欣治の記述に相当する記載は見出せない。

土方正己も「彼が初めて放送の仕事をしたのは、一九三三年頃のこと、ジュール・ロマンの「ドノゴトンガ」をオペレッタ風に直したもので、後年の「花咲く港」のオリジンをなすものだった」(土方正己「ラジオ・ドラマの系譜」、菊田一夫編『ラジオ・ドラマ傑作選』河出書房、1952年、211頁)と述べている。

1932年7月10日の「番組確定表」(NHK放送博物館所蔵)では、題名は「ドノコ」、作者はサトウハチローとなっている。菊田一夫は「解説」担当である。1932年7月10日付『東京朝日新聞』(朝刊)「けふの放送番組」欄では、「ナンセンスレビュー「ドノコ」(サトウハチロー作)」とあり、菊田一夫は「解説」を担当している(以下特に断らない限り、NHK放送劇題名・放送日・放送時間は、NHK放送博物館の御指示によっていることを感謝を込めて記しておく)。

筆者は、菊田一夫と放送劇とのかかわりの嚆矢を「山から来た男」と述べている(「NHK連続放送劇「鐘の鳴る丘」考——浮浪児・戦争孤児へのまなざし——」、「敗戦直後の日本における浮浪児・戦争孤児の歴史」第Ⅱ部、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第103号、2007年12月、35頁)。これは誤りである。

土方正己は、菊田一夫が純粋のラジオ・ドラマとして「かなりや軒」を書き、好評だったので、後に「ムーラン〈ルージュ〉」で上演された」と、「かなりや軒」が菊田一夫の最初のオリジナル放送劇だと述べている(土方正己「ラジオ・ドラマの系譜」211頁)。しかし、「かなりや軒」上演は1933年8月8日(「菊田一夫作品略年譜〈舞台〉」、『東宝』1973年6月号、132頁)で、放送は1936年5月10日(13:20～14:00)であった(「放送劇一覧表」其の一、日本放送協会編『NHK放送劇選集』第1巻、日本放送出版協会、1957年、442頁)。土方正己が述べたのとは異なって、そもそも舞台上演が先であった。

菊田一夫が「純粋のラジオ・ドラマ」として脚本を執筆した放送劇の嚆矢は、NHKが1945年10月28日～12月9日に放送した「山から来た男」(19:00～21:00の30分)である。

「山から来た男」制作経緯などについては、逸見勝亮「NHK連続放送劇「鐘の鳴る丘」考——浮浪児・戦争孤児へのまなざし——」35頁)、並びに同論文注24(51頁)を参照されたい。

菊田一夫は、「山から来た男」は連続放送劇として書いたのが最初で、小説に書き改めたのはその後のことである。常識から言へば、小説が先に生れ、その小説を放送劇なり映画なりに脚色するのが在来のしきたりなのであり、順序でもあるのだが、この本末転倒是私が元来が脚本作家であるといふ理由によつて

説明するよりいたしかたがない」（「あとがき」、菊田一夫『山から来た男』松竹株式会社出版部、1947年、226頁）と述べており、劇作家としての自負は鮮明である。

「山から来た男」の第2回以降の放送日と放送時間は、以下のとおりである。

1945年11月11日（19：00～21：00の30分）

11月25日（19：30～21：00の30分）

12月5・12・19・26日（20：30～21：00）

菊田一夫は、後に「山から来た男」を『愛情の星』（菊田一夫、東方出版、1957年）に収録している。

² 「鐘の鳴る丘」の放送日・放送時間は、「連続放送劇 鐘の鳴る丘放送台本」（謄写版印刷、菊田一夫自筆原稿、古関裕而所蔵本からの複写）（いずれもNHK放送博物館所蔵）によった。

³ 放送劇「東京哀詩」の脚本は『菊田一夫ラジオ・ドラマ選』（宝文館、1951年、87～119頁）に、舞台劇「東京哀詩」脚本は、菊田一夫「東京哀詩」（『日本演劇』1947年3月号、2～46頁）によった。菊田一夫は、舞台劇後半の四分の一以上を削って放送劇とした。

⁴ 「鐘の鳴る丘」の内容は、「連続放送劇 鐘の鳴る丘放送台本」によった。

「連続放送劇 鐘の鳴る丘放送台本」においても、修平の名字を、「加賀見」「賀々見」「加賀美」と表記している場合がある。本研究では「加賀見」と表記する。菊田一夫の原稿にある混乱か筆耕者による混乱かは不詳。

主題歌「とんがり帽子」と劇中の音楽の作曲は、古関裕而が担当した。当初小暮正雄がハモンドオルガンを演奏していたが、菊田一夫の原稿が遅延して作曲する時間がなく、台本の指示に従って即興で演奏したという古関裕而は、その間の事情を次のように回想している。

最初は順調だったが、だんだん台本の仕上がりが遅くなり、作曲が間に合わなくなりそうで、小暮正雄氏に渡すオルガンの楽譜もぎりぎり放送直前になったりした。また菊田さんの音楽指示が複雑になり、ムード表現の作曲はその場その場で、非常に微妙な変化を要求され難しくなってきた。それを伝える時間的余裕もない。ついに独活山さんは菊田と相談して、私自身がオルガンを弾くことになった。小暮さんには悪かったがそれより方法がなかった。小暮さんに電氣的操作と、レジストレーション（音色構成）の基本を教えてもらい三か月目頃から私が弾くことになった（古関裕而『鐘よ鳴り響け』日本図書センター、1997年、174頁。元本は『鐘よ鳴り響け——古関裕而自伝』主婦の友社、1980年刊）。

「連続放送劇 鐘の鳴る丘放送台本」（NHK放送博物館所蔵）によれば、第17回（1947年8月30日）までは小暮正雄が演奏し、第18回（1947年8月31日）は小暮正雄・三上秀俊が、第19回（1947年9月6日）・第20回（1947年9月7日）は三上秀俊が演奏している。第21回（1947年9月13日）以降は、古関裕而が作曲・演奏を担当した。

⁵ 「鳩の団九郎」の脚本は、『菊田一夫ラジオ・ドラマ選集』（菊田一夫、宝文館、1951年、37～85頁）によった。

⁶ 「放送劇一覧表」その三、日本放送協会編『NHK放送劇選集』第3巻、日本放送出版協会、1955年、505～524頁。

⁷ 中川忠彦は放送劇「東京哀詩」を解説して、「バラ座によつて日劇小劇場に上演された同名の劇の放送化であつて、これが「鐘の鳴る丘」の母体となつたものらしい」と述べている（中川忠彦「その人と作品」、菊田一夫『菊田一夫ラジオ・ドラマ選集』宝文館、1951年、276～277頁）。しかし、「東京哀詩」と「鐘の鳴る丘」とでは示唆した浮浪児・戦争孤児の未来が異なっている。むろん、いずれにリアリティがあり、

作劇方法の優位性があるのかという議論は残る。

なお、中川忠彦は「東京哀詩」の放送劇脚本と舞台劇のそれとの違いには注意を払っていない。

⁸ 中川忠彦「その人と作品」280頁。

中川忠彦は、『菊田一夫ラジオ・ドラマ選集』搭載放送劇の解説において、「この集には収めてはいないが、……「鐘の鳴る丘」について一言しておこう。菊田さんの仕事について語る場合、我々はこの大長篇を、どうしても閑却するわけにいかない」(279頁)と述べている。

⁹ 「うたの旅人 菊田一夫作詞「とんがり帽子」、2008年10月4日付『朝日新聞』土曜版。

この記事は、小沢昭一の談話だとして、「海軍兵学校予科生で終戦。帰ると家は焼け、父は病に伏せていた。食うために、演劇をしながら農村を慰問に回った。前座でハーモニカで吹いたのが「とんがり帽子」。必ず大合唱が巻き起こり、「不思議に勇気が持てた」と記している。

¹⁰ 菊田一夫『菊田一夫ラジオ・ドラマ選集』(宝文館、1951年)には、「ゼランジャ城の幽霊」、「鳩の団九郎」、「東京哀詩」、「時計塔の女」、「黒百合夫人」、「狂える季節」、「氷雨降る」、「島の嵐」を所収してある。菊田一夫の他に、宝文館が1954年までに『ラジオ・ドラマ選集』を編んだ劇作家は、内村直也、飯沢匡、木下順二、伊馬春部、森本薫、北条秀司、八木隆一郎、眞船豊である。

¹¹ 「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」上演日は「菊田一夫作品略年譜〈舞台〉」(『東宝』1973年6月号)138頁、「鐘の鳴る丘 信州篇」上演日は東宝株式会社事業課編・発行『有楽座』No.32(1948年7月3日、表紙裏)によった。

¹² 「山から来た男」の上演は、「菊田一夫作品略年譜〈舞台〉」(138頁)と1946年1月27日付『読売新聞』広告によった。上演期間終了日については不詳。

¹³ 菊田一夫を原作者とする映画は、Movie Walker (<http://movie.walkerplus.com>、2013年8月14日に閲覧)を「菊田一夫」で検索すれば42本である。「花咲く港」(松竹、1943年7月29日公開)は『松竹七十年史』(松竹株式会社編・発行、1964年、801頁)に、「夜光る顔」(大映、1946年6月13日公開)は『日本映画発達史』Ⅲ(田中純一郎、中公文庫、1976年、265頁)によった。

¹⁴ 比較が無意味であることを承知で、菊田一夫を侮蔑していた三好十郎をMovie Walkerで検索すれば、三好十郎作品を原作とする映画は、「おスミの持参金」(東宝、1947年9月2日公開、監督滝澤英輔、出演若山セツ子、菅井一郎、沼崎勲など)をはじめとする6本である。

¹⁵ 横山隆一『長篇エ物語 鐘の鳴る丘』東京新報社、1948年、1頁。

¹⁶ 『長篇エ物語 鐘の鳴る丘』96頁。

¹⁷ 川本三郎は、『蜂の巣の子供達』(蜂の巣映画、1948年、監督清水宏)を引き立てるために、「戦争孤児の映画といえば菊田一夫の人気ラジオドラマを映画化した「鐘の鳴る丘」が「あまりに有名だが……やや感傷的で「この子たちを救え」ふうの悲壮なヒューマニズムが過剰だった」と述べている(川本三郎『今ひとたびの戦後日本映画』岩波書店、1994年、170頁)。

きどりのこは、「ラジオドラマの圧倒的な人気に应运て作られた」映画『鐘の鳴る丘』は、「暴力の抑制、敵を許し受け入れる寛容などのモラル」を「日本的センチメンタリズムのパターンに陥りながらも、また押しつけがましくではあるが戦後の人々に真剣に提示している」と述べている(きどりのこ「最大の被害者としての子ども 「鐘の鳴る丘」三部作(1948-49)と「火垂るの墓」(1988)」濱野成生他編『日米映像文学は戦争をどう見たか』日本優良図書出版会、2003年、389頁)。きどりのこは自身の放送劇の記憶には触れているが、映画「鐘の鳴る丘」との異同には言及がない。

井上理恵は、CIE が企画した 15 分単位番組のテストケースとして「菊田の「鐘の鳴る丘」などの学校放送番組が作られる。これは浮浪児救済と多くの大衆に聞いてもらうというプロパガンダの目的があり、短い放送時間にした」、「（「東京哀詩」の）筋は単純だが浮浪児の現実が赤裸々に表現されているから、占領軍の浮浪児対策のメガネにかなない、ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」へと発展的に移行する」（『菊田一夫の仕事——浅草・日比谷・宝塚』社会評論社、2011 年、64・66 頁）と述べている。NHK は「鐘の鳴る丘」を「学校放送番組」には区分していない。筆者には「東京哀詩」の「筋は単純」とは考えられない。井上理恵は舞台劇「鐘の鳴る丘」には言及していない。

¹⁸ 菊田一夫「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」、『青年演劇』1948 年 6 月号、44～45 頁。

¹⁹ 同上。

²⁰ 「芸能史を歩く」、1986 年 2 月 15 日付『朝日新聞』（夕刊）。

²¹ 「うたの旅人 菊田一夫作詞「とんがり帽子」」、2008 年 10 月 4 日付『朝日新聞』土曜版。

岡田芳郎は、菊田一夫は「昭和 20 年代の日本人の心を捉え国民的ドラマ」となった「鐘の鳴る丘」と「君の名は」を書いたとしたうえで、「鐘の鳴る丘」について次のように述べている。

空襲で家族と住む場所を失った戦災孤児たちを主人公にしたこのドラマは、聴取者の当時の貧しい生活・心情に共通する同じ苦難の体験の物語だった。人々は自分のことのようにこの物語を聴いたのである。孤児たちが暮らす施設が丘の上にあり、とがった屋根の時計台に鐘が付いている。……主題歌「鐘の鳴る丘」は、みんなが歌う愛唱歌になった（岡田芳郎「広告・メディア界の礎を築いた人々 第二十一回ラジオを通じて人々を熱狂させてきた菊田一夫・北村寿夫」、『宣伝会議』、No.854、2013 年 2 月 1 日、104～105 頁）。

放送劇「鐘の鳴る丘」は繰り返し語られるが、語られるのは 1947 年 12 月 28 日までの一部である。

²² 高山英男・斉藤次郎「児童文化としてのマス・コミュニケーション（二）戦後」、依田新・日高六郎・木原健太郎編『講座マス・コミュニケーションと教育 1 巻 マス・コミュニケーション時代の教育』明治図書出版、1965 年、114 頁。

高山英男・斉藤次郎は、放送劇「鐘の鳴る丘」と同時期の放送劇「向う三軒両隣り」、「話の泉」、「二十の扉」、「とんち教室」、「私は誰でしょう」（いずれもクイズ番組）なども、「それぞれ子ども向け番組として放送されたのではないのにもかかわらず、子どもたちに支持された」（115 頁）と述べている。

日本放送協会編『放送年鑑 昭和二十三年版』（日本放送出版協会、1948 年）は、上記放送番組はいずれも「演芸演劇の部」に区分している。

²³ 放送劇「鐘の鳴る丘」の再放送については、逸見勝亮「NHK 連続放送劇「鐘の鳴る丘」考——浮浪児・戦争孤児へのまなざし」（37～38 頁）を参照されたい。

勝又浩『「鐘の鳴る丘」世代とアメリカ 廃墟・占領・戦後文学』（白水社、2012 年、7～8 頁）が、次のように述べていることも引いておく。

……『君の名は』の方は、その放送時間は銭湯の女湯ががら空きになったと言われた。そんな伝説もあるほど、時の成人女性たちを圧倒的に惹きつけた恋のすれ違いドラマだったが、一方『鐘の鳴る丘』は、……子供たちを夢中にさせはしたが、大の大人を惹きつけるような話ではなかった。とうてい社会現象の一つとして記録されるようなことではなかったわけだ。やはりその頃はやった歌謡曲『港が見える丘』を意味もわからず歌っていたら、子供がそんな歌を歌うものではないかと母親から叱られたのを覚えているが、考えてみれば、「あなたと二人で来た丘は、港の見える丘」と歌う大人が、

「緑の丘の赤い屋根 とんがり帽子の時計台」と、ともに歌うわけもなかったのだ。あの膨大な数を収録しているカラオケに『鐘の鳴る丘』が入ってなかったのもそんな事情によるだろうか。

勝又浩は、放送劇『鐘の鳴る丘』の主題歌の題名は「鐘の鳴る丘」で、歌詞は「緑の丘の赤い屋根 とんがり帽子の時計台」とであると記憶しているらしい。「とんがり帽子」なら筆者のつたない経験ではカラオケに入っている。

²⁴ 阿久悠『ラヂオ』日本放送出版協会、2000年、161～162頁。

²⁵ 「府県別聴取加入現在数及び普及率(二三年三月末)」(日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和二十三年版』日本放送出版協会、1948年、235頁)によれば、1947年度末の「百世帯当り聴取加入数」は40.6である。沖縄県を除く聴取加入数は6,443,206、総世帯数は15,870,811であった。ちなみに、阿久悠『ラヂオ』の舞台である兵庫県の「百世帯当り聴取加入数」は、37.7であった。

²⁶ 日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和25年版』日本放送出版協会、1950年、409頁。

²⁷ 放送劇「鐘の鳴る丘」の放送時間は公開中継(1949年7月4日)が60分だった以外は15分であった。小幡欣治が「放送継続により一週五日間、一回三十分に延長された」(『評伝 菊田一夫』(岩波書店、169頁)と述べているからには、改めて放送時間を記しておく必要がある。

なお、放送劇「鐘の鳴る丘」の放送時間帯の変化と放送期間は、「NHK連続放送劇「鐘の鳴る丘」考——浮浪児・戦争孤児へのまなざし」(37～38頁)を参照されたい。

²⁸ 「放送週報」第73号(1947年7月13日～7月19日)によれば、放送劇「鐘の鳴る丘」の放送時間(15分)を30分に延長を求める投書が「演芸関係」投書総数49件中13件あった。「NHK連続放送劇「鐘の鳴る丘」考——浮浪児・戦争孤児へのまなざし」(42～43頁)では、「投書の呼びかけと反応」を論じている。

²⁹ 菊田一夫『芝居つくり四十年』オリオン出版社、1968年、61頁。

³⁰ 「児童文化としてのマス・コミュニケーション (二)戦後」113頁。

³¹ 1948年4月2日付『毎日新聞』(大阪)。『激動の昭和スポーツ史 3 高校野球』(上)(ベースボール・マガジン社、1989年、154頁)は、「センバツマーチ 鐘の鳴る丘」と記している。

³² 『ラジオ年鑑 昭和二十三年版』313頁。なお、放送時間帯と番組内容は日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和24年版』(日本放送出版協会、1949年、98頁)を参照した。

³³ 田村良三「浮浪児を救え」(「氣流 読者の欄」)、1948年4月8日付『読売新聞』朝刊。

³⁴ 五十嵐一男「鐘の鳴る丘「とんがり帽子」の思い出」、福島信用金庫「古閑裕而：思い出のメロディミニ作文コンクール 受賞者発表」(http://www.shinkin.co.jp/fsinkin/sakubun_Konku-ru3.htm#1、2013年6月24日閲覧)。古閑裕而は福島県生まれであった。

筆者が所在を確認した紙芝居『鐘の鳴る丘』の表紙には「日教組推薦」とある。「日教組推薦」は、多くの小中学校が紙芝居『鐘の鳴る丘』を所蔵していたことを窺わせる。実際、大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵本には小学校印を押捺してある。いずれの紙芝居『鐘の鳴る丘』も縁が痛んでおり、演じられたことは明瞭である。

管見の限り、この作文は紙芝居『鐘の鳴る丘』が小学校で演じられたことを示す唯一の「証言」である。

³⁵ 「とんがり帽子」、『放送』1947年9月号、2頁。

³⁶ 筆者は、「あの人に会いたい 「君の名は」原作者」(2005年9月18日、NHK教育テレビ、19時45分～55分。「NHKアーカイブス NHK映像ファイル あの人に会いたい」No.059を、2011年8月26日にNHK放

送会館で視聴した。ナレーション・菊田一夫の発言などは、音声とテロップにもとづいて、筆者が作成した。

「あの人に会いたい」「君の名は」原作者」には、映像源は記録されていない。「番組確定表」(NHK 放送博物館所蔵)によれば、1962 年 12 月 27 日の NHK 教育テレビ「婦人の時間 この人この道 菊田一夫」(13:20~14:00)に、菊田一夫・尾崎宏次(質問者)・三益愛子が出演している。両番組の出演者が重なっていることから推察すれば、「あの人に会いたい」「君の名は」原作者」の映像源は、「婦人の時間 この人この道」(1962 年 12 月 27 日)である。

菊田一夫は、「婦人の時間 この人この道」(1962 年 12 月 27 日)以前にも、『今日を限りの』の「プロローグ」(東方社、1957 年、5~7 頁)において、1945 年の「秋も深まったある夕方」田園調布駅まで新聞を求めて出かけた折のこととして、次のように述べている。

ある日のこと、いつものように駅前にさしかかると、数人の人だかりがしている。一寸のぞいてみると、中には十才ぐらいの少年が、もう大分寒くなろうというのに裸同然の姿でふるえている。前身垢だらけで、一見して当時はやりの浮浪児と判る姿であつた。

話をきいてみると、新橋附近から来たという。……僕はとにかく新橋まで帰してやろうと思い、切符を買って新橋まで帰る順序などを教えてやつた。そして、ふと思いついて、なにがしかの金を少年の手に渡そうとすると、少年は意外にも、かたくなに首をふって、

「要りません」

という。こちらの方で驚いて、わけをきいてみると、

「お父さんに叱られるんです」と答える。じゃ、帰ればお父さんがいるんだね、と少し安心して問い返すと、少年は澄んだ眸を向けて、こんなことをいつた。

「お父さんは空襲で死んじゃつたんです。でも、お父さんは、他所の人からお金なんかもらつちやいけないつていつもいつていたんです。もらつたら、きつとおこります……」

僕が浮浪児を描いてみようと思つたのは、このときからだつた。

菊田一夫は、「敗戦日記」1945 年 12 月 2 日の条では、「NHK の仕事に出かける途中」に田園調布駅で「素裸の垢まみれのまだ十歳にはならない年頃の浮浪児」と遭遇し、切符を買い与えて新橋まで同道し、「お父ちゃんとお母ちゃんはどうした」と尋ねたところ、「知らねや、ばかやろー」と言ったきり口をきかなくなった」と記している(菊田一夫『芝居つくり四十年』232~234 頁)。

³⁷ 西村晋一「解題」、『菊田一夫戯曲選集』2、演劇出版社、1966 年、585~589 頁。「東京哀詩」上演日程なども同書によった。

³⁸ 菊田一夫「戦中・戦後」、帝劇史編纂委員会編『帝劇の五十年』東宝株式会社、1966 年、20~21 頁。菊田一夫は、情報局の新劇俳優に依る上演との求めに応じて、薄田研二・鶴丸睦彦・村瀬幸子など新劇の「ベテラン」に特別出演を乞うて、これを脇に配した」とも述べている(20 頁)。

³⁹ 敗戦後も、新国劇が 1951 年 10 月(明治座)・1952 年 9 月(名古屋御園座)・1952 年 10 月(京都南座)、名作鑑賞会が 1960 年 6 月(芸術座)、東宝現代劇が 1961 年 4 月(芸術座)、新芸座が 1963 年 2 月(宝塚新芸劇場)に、「花咲く港」を上演している(西村晋一「解題」、『菊田一夫戯曲選集』1、565~566 頁)。

⁴⁰ 放送劇「鐘の鳴る丘」の概要は、「NHK 連続放送劇「鐘の鳴る丘」考——浮浪児・戦争孤児へのまなざし」(39~41 頁)に加筆して再掲した。

⁴¹ 小幡欣治『評伝 菊田一夫』岩波書店、2008 年、167 頁。

⁴² 古関裕而『鐘よ鳴り響け』174頁。

⁴³ 放送劇「鐘の鳴る丘」第15回(1947年8月23日)、同第245回(1948年12月6日)のMD版作成者・作成時・音源は不詳である。

⁴⁴ SPレコード「放送劇 鐘の鳴る丘」(一)～(四)は、国立国会図書館・昭和館で聴取できる。

⁴⁵ 菊田一夫『鐘の鳴る丘 (第一篇 隆太の巻)』ラジオ新聞社出版部、1948年、3頁。

⁴⁶ 同上。

⁴⁷ 「昭和二十二年七月五日／連続放送劇 鐘の鳴る丘(1) 菊田一夫／NHK放送台本」(菊田用)、タイプ謄写、NHK放送博物館所蔵。

⁴⁸ 『鐘の鳴る丘 (第一篇 隆太の巻)』10頁。菊田一夫が付した「放送技術用語解説——ラジオ劇を書く方のために——」(5～6頁)によれば、T.F、F.I、H.U、C.Fはそれぞれ to finish (完奏)、fade in (かすかな音で開始されて次第に、大きく、或は強くなる)、hold under (しばって会話または他の音楽の背後に流す)、cross fade (音楽から効果へ、効果から音楽へ、フェイド・アウトとフェイド・インとが交叉して移り変わる)の略語である。

⁴⁹ 「昭和二十二年七月五日／連続放送劇 鐘の鳴る丘(1) 菊田一夫／NHK放送台本」(菊田用)。

⁵⁰ 同上。

⁵¹ 『鐘の鳴る丘 (第一篇 隆太の巻)』24頁。

⁵² 8編のラジオ・ドラマを所載した菊田一夫『菊田一夫ラジオ・ドラマ』(宝文館、1951年)には、作品冒頭に登場人物の一覧、巻末に放送記録(放送日、配役、スタッフ)を載せている。

⁵³ 「連続放送劇 鐘の鳴る丘」第10回(1947年8月3日)放送脚本。

⁵⁴ 「連続放送劇 鐘の鳴る丘」第24回(1947年9月21日)放送脚本。

⁵⁵ 「連続放送劇 鐘の鳴る丘」第42回(1947年11月22日)放送脚本。

⁵⁶ 菊田一夫『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』ラジオ新聞出版部、1948年、214頁。

⁵⁷ 『鐘の鳴る丘 (第二篇 信州の巻)』3～4頁。

⁵⁸ 菊田一夫は、「プキテマ高地」を「読む為の戯曲の最初のもの」と述べている(菊田一夫『わが家の幸福』輝文館、1942年、431頁)。『わが家の幸福』には、他に「わが家の幸福」、「下駄分隊」、「あさくさの子供」、「道修町」を収録してある。いずれも菊田一夫が1940年～1942年に古川緑波一座のために書き下ろし、有楽座で上演した舞台劇の脚本である。菊田一夫は、「読む為の戯曲」を執筆する一方で、周到に「主人公の姿に、緑波氏の老役、或は青年の姿をあてはめて読んでいたゞきたい。上演台本といういふものは、でなければ読んでも面白くないものである」(431頁)とも述べている。

⁵⁹ 菊田一夫『菊田一夫戯曲選集』1、演劇出版社、1965年、516・571頁。

⁶⁰ 「放送劇 鐘の鳴る丘」第53回(1948年1月4日)放送脚本によった。ただし、放送脚本の3～12枚は欠落している。出演者は、佐藤克彦(東京都練馬区立豊玉第二小学校教諭、子役児童・白鳩会指導者)、小山源喜・渡辺富美子・巖金四郎(出演者、東京放送劇団)、独活山萬司(NHKディレクター)などである。

「正月お休みの巻」は、「あ、作者の菊田一夫が入ってきました」と始まる。菊田一夫と出演者を登場させ、今後の物語の展開・映画作成・出版・主題歌「とんがり帽子」レコード(川田正子)の発売など、関連する事項を話題にのぼせて、聴取者の興味を引こうとしたと考えられる。菊田一夫の、エンターナーとしての面目が躍如としている。

⁶¹ 1948年1月17日付『読売新聞』朝刊。新聞広告には、題名は「鐘の鳴る丘」とあるのみで、『青年演劇』

搭載戯曲にある「N・H・K 連続放送劇より」はない。

⁶² 「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」44 頁。

⁶³ 「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」4 頁。

⁶⁴ 「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」44 頁。

⁶⁵ 「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」23 頁。

⁶⁶ 「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」19 頁。

⁶⁷ 「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」29 頁。

⁶⁸ 「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」44 頁。

⁶⁹ 公演期間などは、「菊田一夫作品略年譜〈舞台〉」（『東宝』第 80 号、1973 年 6 月号、138 頁）によった。「菊田一夫作品目録 主なる著作物（小説・随筆）編」（146～149 頁）は、雑誌からは採っていない。

なお、『菊田一夫戯曲選集』1（演劇出版社、1965 年）は「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」を収録していない。『菊田一夫戯曲選集』1 に収録した「鐘の鳴る丘」の出典は、菊田一夫『鐘の鳴る丘 第一篇 隆太の巻』（ラジオ新聞社出版部、1948 年）の 7～157 頁（第 1 回～第 12 回放送分）である。西村晋一は「信州篇」の抜粋を収録したい（571 頁）と述べているが、『菊田一夫戯曲選集』2・3 には収録していない。「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」上演について言及（572 頁）はある。「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」を収録しなかったのは、菊田一夫の意向を受けてのことだろうが、その間の事情を知り得る資料は見当たらない。

⁷⁰ 1948 年 2 月 15 日付『読売新聞』朝刊。

⁷¹ 1948 年 7 月 11 日付『読売新聞』朝刊。

⁷² 尾崎宏次「浮浪児の芝居 “鐘の鳴る丘” をみて」、『日本演劇』1948 年 3 月号、39～41 頁。

劇評としては、大島繼治「鐘の鳴る丘を見る」（『演劇会』1848 年 3 月号、20～21 頁）、大神田鶴子「鐘の鳴る丘を見て」（『演劇会』1848 年 3 月号、21 頁）、村岡花子「愛は強し」（『中学雑誌』1948 年 5 月号、19 頁）、Y・H「鐘の鳴る丘——演劇評」（『社会と学校』1949 年 3 月、17 頁）がある。村岡花子「愛は強し」は、「鐘の鳴る丘」の舞台面に見入る子どもたちの写真を載せているが、舞台劇を観た「女学生の娘」の話にもとづいている。

『中学雑誌』1948 年 5 月号（冒頭グラビア）、『ホープ』1948 年 4 月号（1～3 頁）は、舞台写真を載せている。

⁷³ 東宝三十年史編纂委員会編『東宝三十年史』別冊、東宝株式会社、1963 年、203 頁。

⁷⁴ 「（座談会）現代戯曲の諸問題」、『日本演劇』第 6 巻第 5 号、1948 年 5 月 1 日、10～11 頁。参加者は、三好十郎、押川昌一、高橋昌之助、笠松草一郎、浅井富彦、石崎一正、高岡宣之、戸板康二。

⁷⁵ 「ふうすふう」欄、『日本演劇』1947 年 4 月、64 頁。同誌「編集机より」欄には、「この号の脚本は、菊田一夫氏の「東京哀史」一七〇枚をのせる。すでにバラ座が日劇小劇場で公演し、好評を博して作品である。三月に再演されて、都下好劇家の話題となった力作、御精読を乞ふ」（64 頁）とある。

⁷⁶ 「N・H・K 連続放送劇より 鐘の鳴る丘」33～34 頁。

⁷⁷ 「演劇評」、1947 年 1 月 17 日付『東京新聞』（倉林誠一郎『新劇年代記』〈戦後編〉、白水社、1966 年、67～68 頁から重引）。

⁷⁸ 佐々木孝丸「菊田一夫」、『日本演劇』第 7 巻第 9 号、1949 年 9 月 1 日、19～23 頁。

⁷⁹ 中川忠彦「その人と作品」、菊田一夫『ラジオ・ドラマ選集』宝文館、1951 年、277 頁。

⁸⁰ 菊田一夫「『東京哀史』に就いて——演出覚え書き」、阿木翁助他『現代戯曲』第4巻、河出書房、1952年、141頁。「模倣」の該当箇所は、「東京哀史」の夢の中で浮浪児が天上の両親と会って食事を共に摂る場面と、「白い雲」の天上で暮らしている戦死した父親に子どもらが会う場面である。菊田一夫はガード下の異次元空間として子どもの夢を設定するのだが、モルナールの子どもの階段を昇降して天上と地上を往復する、つまり天上は異次元空間ではない。そもそも「白い雲」の主人公は戦死者であり、子どもは母親と暮らしている。「模倣」と記したのは、菊田一夫の謙遜である。

⁸¹ 尾崎宏次「ある感想」、『悲劇喜劇』1980年3月号、49頁。同誌は1979年4月4日に死去した菊田一夫の追悼特集を編んだ。

⁸² 「愛情について モルナールの作品より」上演台本、謄写版、松竹大谷図書館所蔵。

⁸³ 『三越劇場 昭和廿二年九月興業』1947年9月、2頁。松竹大谷図書館所蔵。

「男の流行」は「菊田一夫作品略年譜 〈舞台〉」(『東宝』1973年6月号)には載っていない。「男の流行」を上演した前年に、菊田一夫が執筆して演出した「舞台は廻る」(榎本健一座、有楽座、1946年3月30日～4月10日)は、「リリオム」(モルナール原作・藤田純一脚色、榎本健一座)と2本立で上演された(東宝三十年史編纂委員会編『東宝三十年史』別冊、東宝株式会社、1963年、144頁)。菊田一夫がこの「リリオム」を観たかどうかは不詳だが、モルナールの「リリオム」を知っていたはずである。

菊田一夫は、1969年にはモルナール「白鳥」(1920年)にもとづき、帝劇グラント・ロマン公演と銘打った「白鳥」の脚本と演出を担当した。出演は山田五十鈴・那智わたる・益田喜順・千石規子・市川染五郎・夏川静枝・仲谷昇などで、公演期間は1969年8月5日～30日であった。

菊田一夫は、「御挨拶」で「世界的に知名なハンガリーの作家」フェレンツ・モルナールは、「コメディ風な対話の運び、せんれんされたユーモアと哀愁に満ちた作風で異彩をはなっております」と述べている(東宝株式会社事業部出版課編・出版「『白鳥』公演パンフレット」1969年8月5日、2頁)。

徳永康元は「モルナール」(「『白鳥』公演パンフレット」26～28頁)で、モルナールの経歴と作品、日本での上演などについて解説したが、菊田一夫とモルナールとのかかわりには触れるところがなかった。

⁸⁴ 『三越劇場 昭和廿二年九月興業』1947年9月、2頁。

⁸⁵ 『有楽座』No.32、1948年7月3日、表紙裏。なお、上演期間は『東宝三十年史』(別冊、146頁)では、1948年7月3日～8月3日と記している。

⁸⁶ 『有楽座』No.32、表紙裏。

⁸⁷ 『有楽座』No.32、3頁。

⁸⁸ 「劇評」欄、1948年7月12日付『朝日新聞』朝刊。

⁸⁹ 『有楽座』No.32、2～3頁。

⁹⁰ 内村直也・三島由紀夫・宮津博編『日本童話劇』下、誠文堂新光社、1951年、316頁。

⁹¹ 映画「鐘の鳴る丘」の制作・上映等は、『松竹七十年史』1964年、805・806頁によった。

⁹² 『松竹七十年史』309・310頁。

⁹³ 『月刊アイワード』1996年2月号、4頁。

⁹⁴ 1949年1月7日付『新愛媛新聞』。国立国会図書館憲政資料室「日本占領期検閲雑誌(メリーランド図書館ゴードン・W・プランゲ所蔵)1945年～1949年(昭和20年～昭和24年)——マイクロフィッシュ版」(国会図書館所蔵プランゲ文庫と略記する)によった。

⁹⁵ 筆者の体験では、室蘭市立天沢小学校在籍中(1950～1955年)に、学年単位で観た映画は、「白雪姫」

(1950 年 9 月 26 日公開*)、「バンビ」(1951 年 5 月 26 日公開*)、「ピノキオ」(1952 年 5 月 17 日公開)、「ひろしま」(1953 年 12 月公開*)、「ダンボ」(1954 年 3 月 12 日公開)、「二十四の瞳」(1954 年 9 月 16 日公開*)である。

筆者が同時期に家族と観たのは「白い馬」(1954 年 1 月～6 月公開*)だけであり、映画は学級担任に引率されて観るものであった。

国内公開日は、*を付した作品は時事通信社編・発行『映画年鑑』(1952・1955・1956 年版、復刻版、日本図書センター、1998 年)に、他は Movie Walker (<http://movie.walkerplus.com>、2013 年 8 月 14 日に閲覧)によった。

⁹⁶ 菊田一夫「数百万児童待望の映画「鐘の鳴る丘」によせる」、『映画世界』1948 年 6 月号、7 頁。松竹大谷図書館所蔵。

⁹⁷ 『松竹映画 NEWS 鐘の鳴る丘』44、松竹大谷図書館所蔵。刊行年月日は記載がないが、「放送原稿」欄には「大人も、子供も、みんな泣いた連続放送劇を映画化した「鐘の鳴る丘」の上映は次週〇日よりでございます」とあるので、発行は東京浅草国際劇場の封切(1948 年 11 月 23 日)直前であろう。

⁹⁸ 「封切成績一覧」、時事通信社編・発行『1950 年 映画年鑑』1949 年、421～424 頁。復刻版(日本図書センター、1998 年)によった。いずれの作品も観客動員総数は知る手がかりもない。

⁹⁹ 登川直樹「鐘の鳴る丘——隆太の巻」、『日本映画批評』、『キネマ旬報』第 49 号、1949 年 1 月 1 日、37 頁。

¹⁰⁰ 『キネマ旬報』第 51 号、1949 年 2 月 15 日、19 頁。

¹⁰¹ 『静かなる対決』については大笹吉雄『日本現代演劇史 昭和戦後篇』(1998 年、白水社、297～298 頁)、『フランチェスカの鐘』については大曾根辰夫「演出の弁」(『松竹』第 4 巻第 5 号、1949 年 5 月 1 日、34 頁、松竹大谷図書館所蔵)によった。

¹⁰² 柴田芳男『映画館ものがたり』学風書院、1959 年、28～29 頁。柴田芳男が経営していた映画館名は、「全国映画館総覧」(『1950 年 映画年鑑』158 頁)によった。

¹⁰³ 亀井實「映画「鐘の鳴る丘」を話題に 学童座談会 傍聴記」、『視覚教育』第 2 巻第 4 号、1949 年 4 月 5 日、19 頁。国会図書館所蔵プランゲ文庫によった。

¹⁰⁴ Y.M「鐘の鳴る丘」、『学校と家庭』創刊号、1949 年 5 月、39 頁。国会図書館所蔵プランゲ文庫によった。

¹⁰⁵ 『第四篇 鐘の鳴る丘(カラスの巻) 松竹作品』松竹大谷図書館所蔵。著者・作成時の記載はない。

¹⁰⁶ 菊田一夫『鐘の鳴る丘』上、宝文館、1953 年、225 頁。

¹⁰⁷ 菊田一夫『鐘の鳴る丘』下、宝文館、1953 年、278 頁。

謝辞

本論文執筆に際しては、多くの諸機関に甚大な御協力を仰いだ。以下に機関名を記して謝辞に代える。

NHK 放送博物館、松竹大谷図書館、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館図書室、大阪府立中央図書館国際児童文学館、国立国会図書館国際子ども図書館、白百合女子大学児童文化研究センター、昭和館、国立国会図書館、北海道立図書館、札幌市立図書館、北海道大学附属図書館